

広原遺跡

太陽光発電所建設水路付け替え工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2023

長野県富士見町教育委員会

例 言

- 1 本書は令和3年に富士見町教育委員会が行った^{ひろつばら}広原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、太陽光発電所建設水路付け替え工事に伴う発掘調査として富士見町教育委員会が実施した。
- 3 本書に係る発掘調査は以下の日程で行った。
発掘調査：令和3年7月6日～10月15日
整理作業：令和4年10月1日～令和5年1月31日
- 4 発掘調査はいずれも副島蔵人が担当し樋口誠司が補助した。本書の執筆および編集は副島蔵人が行い、小松隆史と樋口誠司が補助した。
- 5 出土遺物の自然科学分析についてはバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、同社からの報告書を副島が編集し、第4章とした。
- 6 本報告に係る出土品、諸記録は井戸尻考古館に保管されている。
- 7 調査担当者および発掘調査作業員・整理作業員は以下の通り。

発掘調査

調査担当者 副島蔵人

調査員 平澤愛里 樋口誠司

発掘作業員 五十嵐裕子 小池敦子 小林美知子 五味加奈子 鶴田敏子

ボランティア 根本万輝 平澤修

整理作業

整理作業担当 副島蔵人

整理作業員 平澤愛里 五十嵐裕子 伊藤知恵 小池敦子 五味加奈子 根本万輝

- 8 発掘調査及び出土品整理作業では下記の方々にご指導、ご助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
岩永祐貴 櫛原功一 小林公明 中村由克

凡 例

- 1 本書で使用した地図は1：2500「富士見町都市計画図」、1：10000「富士見町の遺跡」（2015）である。
- 2 挿図の縮尺については原則として下記のとおりであり、各挿図中に示してある。
調査区全体図：1/60
調査区断面図…1/60
遺物：石器…1/3（一部1/6）、小形石器…1/2、縄文土器（実測図）…1/4（一部1/2）、
縄文土器（拓本）…1/3
- 3 方位は各図に示した。いずれも磁北ではなく真北を指している。
- 4 土層注記に使用した色調は「新版標準土色帖」の色名を参考にした。
- 5 写真図版の遺構および遺物の縮尺はすべて任意である。

目 次

例言・凡例

目次

第1章 発掘調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯と概要	1
第2節 発掘調査の概要	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第1節 遺跡の立地	2
第2節 周辺の遺跡	2
第3章 遺構と遺物	3
第1節 C区の遺構と遺物	3
(1) CⅠ区の遺構と遺物	3
(2) CⅡ区の遺構と遺物	14
(3) CⅢ区の遺構と遺物	23
第4章 自然科学分析	26
第1節 分析概要について	26
第2節 放射性炭素年代測定	26
第3節 微細物分析	27
第5章 まとめ	30
第1節 出土遺物について	30
第2節 広原遺跡の縄文中期集落について	30

参考文献

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と調査地点	1	第12図 CⅠ区3号住居址出土遺物(5) ...	13
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第13図 CⅠ区遺構出土遺物	14
第3図 C区 遺構位置図	4	第14図 CⅡ区 全体図(1)	16
第4図 CⅠ区 全体図	5	第15図 CⅡ区 全体図(2)	18
第5図 CⅠ区1号住居址出土遺物	6	第16図 CⅡ区遺構出土遺物(1)	20
第6図 CⅠ区2号住居址出土遺物(1)	7	第17図 CⅡ区遺構出土遺物(2)	22
第7図 CⅠ区2号住居址出土遺物(2)	8	第18図 CⅢ区 全体図	24
第8図 CⅠ区3号住居址出土遺物(1)	9	第19図 CⅢ区 43号小竪穴	25
第9図 CⅠ区3号住居址出土遺物(2) ...	10	第20図 CⅢ区遺構出土遺物	25
第10図 CⅠ区3号住居址出土遺物(3) ...	11	第21図 暦年較正結果	27
第11図 CⅠ区3号住居址出土遺物(4) ...	12	第22図 炭化種実	29

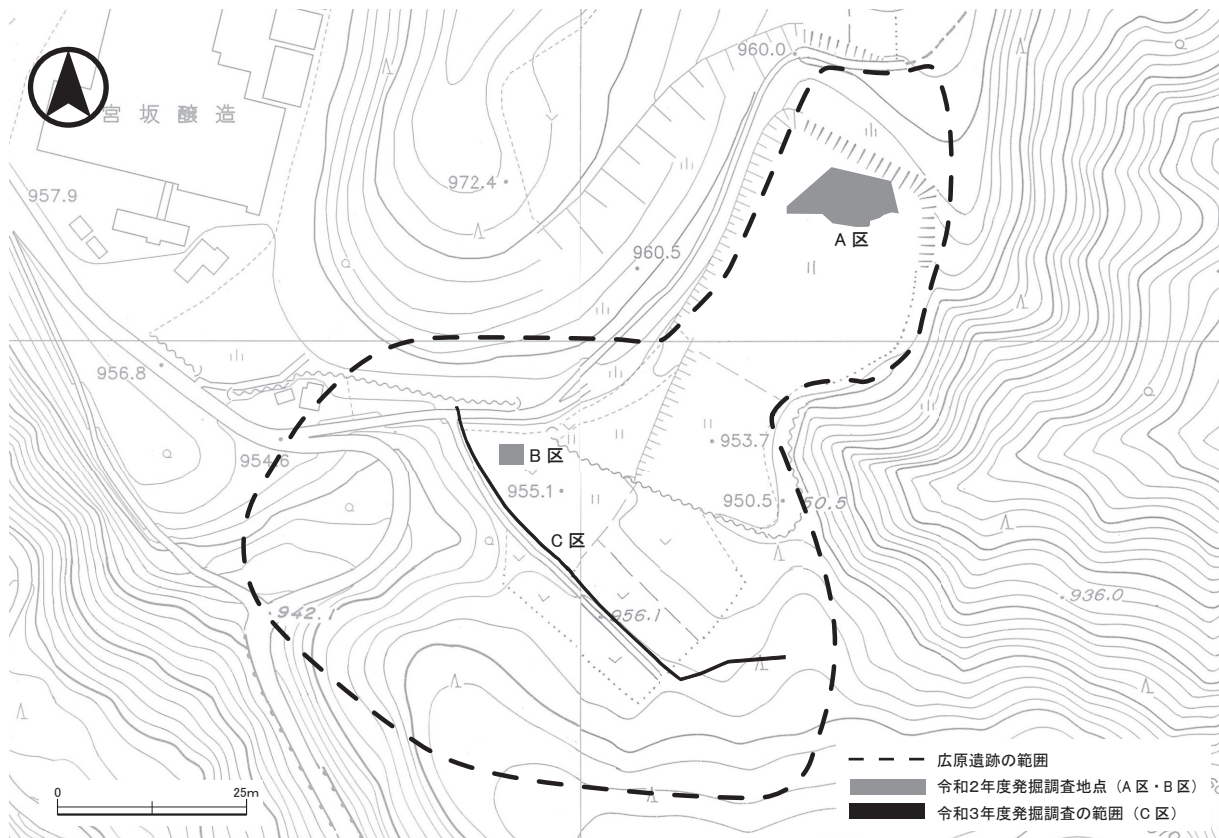
第 1 章 発掘調査の概要

第 1 節 調査に至る経緯と概要

平成30年5月に GPSS ホールディングス株式会社より太陽光発電事業に伴う埋蔵文化財の照会があり、^{ひろつぼら}広原遺跡に該当することから工事主体者、町教育委員会の2者による保護協議を行った。その後、試掘調査を経て、記録保存のための発掘調査を実施し、令和2年度末に発掘調査報告書を刊行した（富士見町教育委員会2021）。

太陽光発電所建設工事が進められる中で、用地内の水路を発電所外へ付け替える必要が生じたため、町建設課と町教育委員会、事業主体者の三者で協議を実施した。前年度B区調査地点に近接していることから遺構が発見される可能性が高かったが、水路工事が狭小であることから工事立会いを実施することとなった。令和3年7月6日に水路掘削工事が始まったが、表土を除去した時点で遺物が散見され、遺構の輪郭もとらえられたことから、事業者と協議して発掘調査に切り替えることとなった。

隣地で建設工事施工途中であったため、車両搬入路を確保しながら調査を開始した。CⅡ区とCⅢ区から掘削を始め、両区の調査終了後8月29日に埋め戻し、建設工事の日程と合わせてCⅠ区の調査を9月29日より開始した。CⅠ区の調査を10月15日に終了し、同日、本件に係る調査をすべて終了とした。



第1図 遺跡の位置と調査地点（1：2500）

第 2 節 発掘調査の概要

工事が狭小のため工事立会いとしていたが、工事中に遺構・遺物が散見されたため、発掘調査に切り替えて調査を行うこととなった（C区）（第1図）。

全体で縄文時代中期の住居址4軒、小竪穴43基を発見した。3号住居址から1号小竪穴までがCⅠ区、2号小竪穴から40号小竪穴の北側までがCⅡ区、40号小竪穴より南東側がCⅢ区である。

調査はバックホーで表土を除去したのち、鋤簾がけで精査し、それぞれの遺構について掘削・記録・測量を行い、10月15日に調査を終了した。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

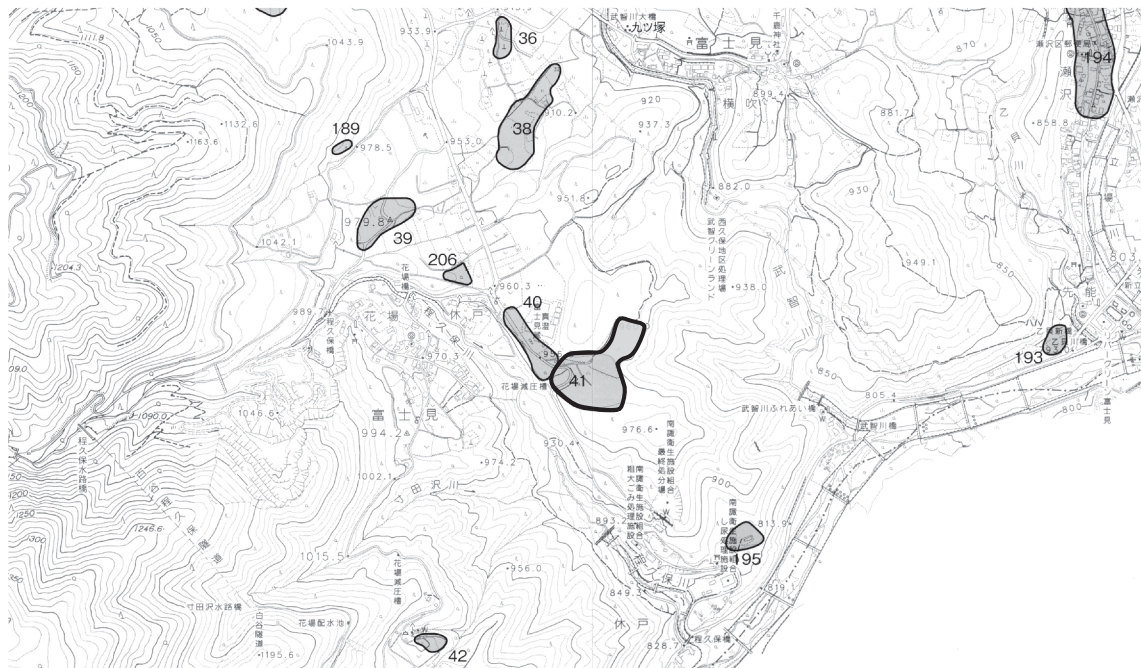
本遺跡は山梨県との県境、富士見町休戸区に位置する。釜無川を挟んで東側の対岸は山梨県北杜市白州町となる。入笠山の東南麓、釜無川の支流である程久保川と武智川に削られた丘陵の標高約960mの広い平坦面に立地する。現在は四方を山林に囲まれているが、以前は東に井戸尻遺跡群、西に南アルプスの鋸岳を望むことができた景勝地であったと言われる。

第2節 周辺の遺跡

広原遺跡は富士見町における周知の埋蔵文化財包蔵地 No.41「広原遺跡」として登録されており、西に無法塚遺跡 (No.40)、北に城の尾根遺跡 (No.38) や阿原端下遺跡 (No.36) といった縄文時代中期の遺跡が点在する (第2図)。

富士見町の中でも宮川および立場川を挟んで南西側の入笠山麓部一帯、通称西山地域では、八ヶ岳西南麓に比べると縄文時代の遺跡が少なく、そうした中で本遺跡と城の尾根遺跡は多くの遺物が採集できたため、この地域の縄文時代中期の拠点集落として古くから注目されており、『富士見村誌』(富士見村誌刊行会1961) 編纂に伴う調査事業として昭和27年に宮坂虎次によって2軒の住居址が調査された。この2軒にはいずれも埋甕があり、出土遺物から中期末葉とされている。また、この地から表採したと言われる個人蔵の台付壺が『井戸尻』(藤森編1965) で紹介されている。

本遺跡の周囲にはこのほかに縄文時代中期の包蔵地である馬詰平遺跡 (No.39) や大小屋遺跡 (No.42)、原休戸遺跡 (No.206) があるものの、無法塚遺跡や城の尾根遺跡とともに、これまで発掘調査は行われておらず、この周辺の縄文時代の様相はよくわかっていない。縄文時代以外の遺跡には穴の尾遺跡 (No.189、近世の製鉄址)、片瀬遺跡 (No.193、中世の集落址)、瀬沢遺跡 (中世・近世の古村)、休戸遺跡 (No.195、中世・近世の古村) が点在する。



41：広原遺跡 36：阿原端下遺跡 38：城の尾根遺跡 39：馬詰平遺跡 40：無法塚遺跡 42：大小屋遺跡
189：穴の尾遺跡 193：片瀬遺跡 194：瀬沢遺跡 195：休戸遺跡 206：原休戸遺跡

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1：20000)

第3章 遺構と遺物

第1節 C区の遺構と遺物

縄文時代中期の住居址4軒、小竪穴43基を検出した（第3図）。43号小竪穴は陥し穴であり、それ以外の小竪穴は墓墳、貯蔵穴および柱穴とみられる。

原地形はCⅡ区とⅢ区の境に80cmほどの段差があり、CⅢ区の方が高くなる。43号小竪穴から東に10mの地点で調査区が直角に折れて谷に向かって落ちてゆく。調査区の幅が狭く、遺構がとらえづらかったため、遺構確認面はローム層としたが、断面ではその上の黒褐色土層から掘り込みが見える遺構もあった。

(1) CⅠ区の遺構と遺物

4軒の住居址と1基の小竪穴を発見した。住居址はいずれも曾利期のもので、住居址の切合いや出土遺物から4号が最も古く、次いで2号→1号→3号の順で新しくなると考えられる。3号住居址は土器の集中廃棄がみられる。

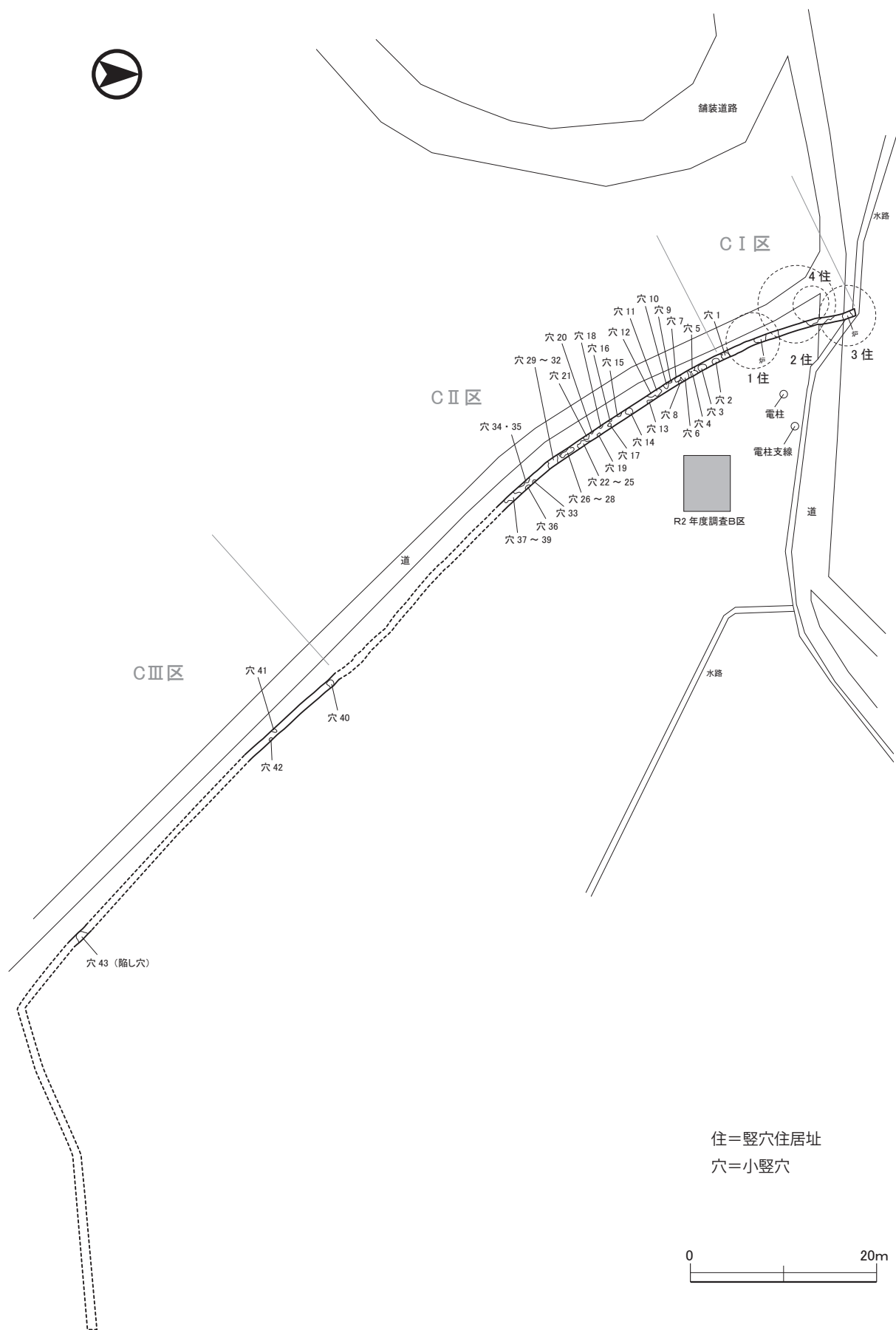
1号住居址

推定径5.7mの竪穴住居址である（第4図）。2号住居址を切っている。円形の住居址になると思われる。遺構確認面から床面までの深さは15cm程度だが、調査区壁面では60cm程度の掘り込みであることが確認できる。床はロームで固い。柱穴は3基で、P1・3が支柱穴と考えて良いだろう。南側P1の底には柱痕と思しき黒色の粘土層が薄く残っていた。周溝は北に2本、南に3本走る。柱穴P2とP3が切り合っている点や、周溝が複数ある点を考えると、拡張による建て替えが行われた可能性が高い。炉址は大きく、床面より40cm程度の深さがある。炉の底面は被熱により全体が硬化しており、一部赤く焼けている箇所が見られた。炉石の抜き取り痕は南側では確認できたものの、ほかの箇所では確認できなかった。

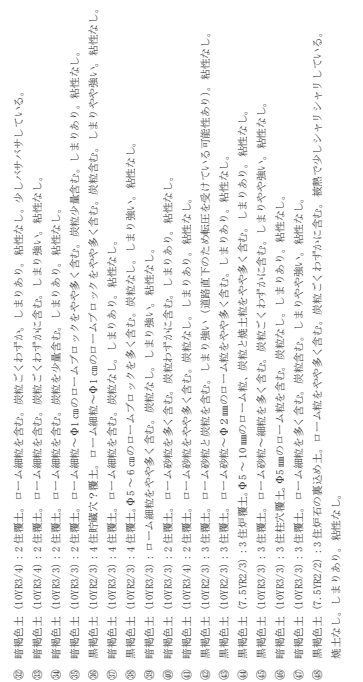
重機掘削の段階で、南端から1m北にある埋設土器（第5図6）を発見したが、土器の最下部が床面より20cmほど高い位置であった。調査区壁面で別遺構の掘り込みを確認できなかったため、この埋設土器が住居址に伴うものなのか、別の小竪穴に伴うものなのかは判断できなかったが、床面との距離を考えると別遺構の可能性が高そうである。この覆土である焼土が一部東側調査区壁面で確認できる。埋設土器は頸部に斜行条線が施される曾利Ⅱ式のやや大きい深鉢で、少し割り開かれたような状態で見つかった。輝緑岩（第5図5）で蓋がされている。

発見された遺物は少ない（第5図）。1は石庖丁で、裏面はほぼ礫皮である。2は刃器で、刃部に調整痕が見られるが定形的ではない。3は先端と側縁に敲打痕を残す、折れた敲き石である。4は埋設土器内部で発見された敲き石である。5は埋設土器の蓋石で、裏面を上面にして置かれていた。3箇所に人為的な窪みが見られる。6は前述の埋設土器で、頸部から胴下半部までが残っている。文様の描き方は雑で、頸部の条線が胴部まではみ出し、垂下隆帯上の半裁竹管文も粗雑な押さえ方となっている。7～14は覆土中の土器であり、うち7・9・11・14は炉覆土の出土である。7は新道式、8・9は井戸尻Ⅰ式である。8は隆帯上を指頭で等間隔に押した装飾が一周するようである。10は曾利Ⅱ式、11は詳細時期不明であるが、縦位の条線から曾利式とみられる。12は唐草文系土器であるが、小片のため、詳細な時期は不明である。13・14は唐草文系Ⅱ段階である。

出土遺物より、本址は曾利Ⅱ期の住居址と考えられる。



第3図 C区 遺構位置図 (1:600)



① 暗褐色土 (7.5YR6/3) : 遊動による腐土 (ローム主軸)。遊動部分が砂礫。
② 暗褐色土 (7.5YR7/2) : 表土部より厚層中土。
③ 暗褐色土 (7.5YR7/2) : 灰褐色土の可能性がある。混入物なし。CII区に相当。
④ に近い、暗褐色土 (10YR8/3) : 自然暗褐色土。しまりあり。粘性なし。CIII区に相当。
⑤ 暗褐色土 (10YR9/3) : 穴1層上。1~3mmのローム散を多く含む。炭灰少量含む。しまりあり。粘性なし。
⑥ 暗褐色土 (10YR9/3) : 柱状土。ローム散の少量を含む。炭灰ごくわずかに含む。しまりあり。粘性なし。
⑦ 暗褐色土 (10YR9/3) : ⑥と同じだが、炭灰がやや多々。しまりありがやや強い。
⑧ 暗褐色土 (10YR9/3) : ローム細粒と炭灰をやや多く含む。しまりあり。粘性なし。
⑨ 暗褐色土 (10YR9/3) : 柱状穴覆土。ローム細粒を多く含む。炭灰ごくわずかに含む。しまりあり。粘性なし。
⑩ 暗褐色土 (10YR9/3) : 柱状穴覆土。含有物なし。しまり強い。粘性なし。
⑪ 暗褐色土 (7.5YR7/2) : 柱状穴覆土。黒色のローム散を少量含む。炭灰わずかに含む。⑩よりしまりが強い。粘性なし。
⑫ 暗褐色土 (10YR9/3) : 柱状土。3~5mmのローム散を少量含む。炭灰わずかに含む。⑩よりしまりが強い。粘性なし。
⑬ 暗褐色土 (10YR9/3) : 柱状土。Φ1cmの硬質ブロックと炭灰を含む。頑強土層に伴うもの。しまりあり。粘性なし。
⑭ 暗褐色土 (10YR9/3) : 柱状土。Φ1.5mmのローム散と炭灰を少量含む。しまりあり。粘性なし。
⑮ 暗褐色土 (10YR9/3) : 柱状土。Φ1mmのローム散と焼土を炭灰を多く含む。しまりあり。粘性なし。
⑯ 暗褐色土 (10YR9/3) : 柱状穴覆土。1cm程度のローズブロックを少量含む。炭灰なし。しまりあり。粘性なし。
⑰ 暗褐色土 (10YR9/3) : 柱状穴覆土。0.5~10mmのロームブロックを主軸。炭灰ごくわずかに含む。しまりあり。粘性なし。
⑱ 暗褐色土 (10YR9/3) : 柱状穴覆土。Φ0.5~10mmのロームブロックを主軸。炭灰少量含む。しまりあり。粘性なし。
⑲ 暗褐色土 (10YR9/3) : 柱状穴覆土。Φ1cmのローム散を含む。炭灰はごくわずかに含む。しまりや強い。粘性なし。



第5図 C I区 1号住居址出土遺物 (1~4・7~14:1/3、5:1/6、6:1/4)

1:硬砂岩、2:粘板岩、3:砂岩、4・5:輝緑岩

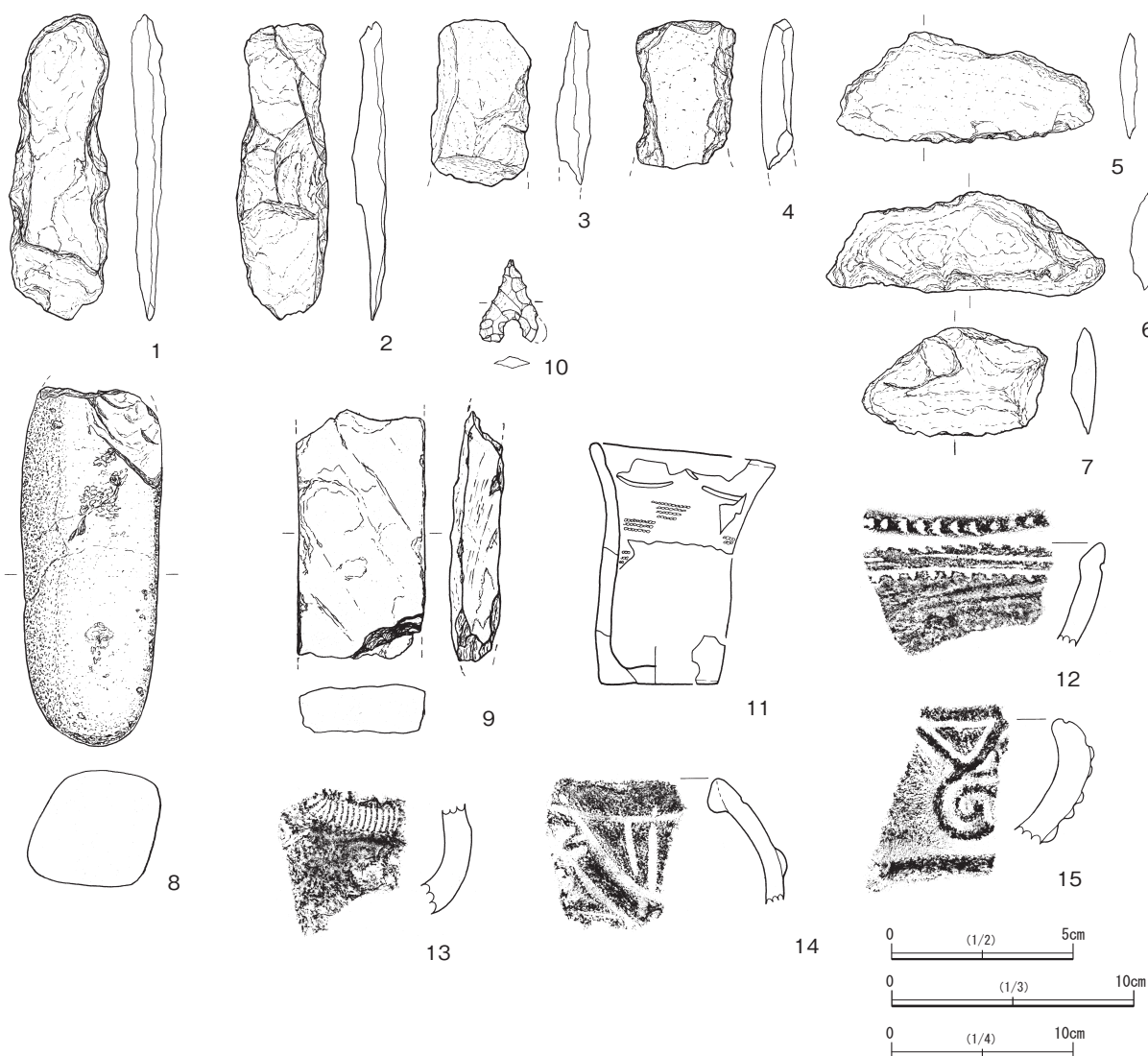
2号住居址

南端を1号住居址に切られているため、大きさは不明であるが、径6 m以上はある竪穴住居址である（第4図）。北側の覆土が3号住居址に切られており、4号住居址の覆土を削っている。住居址の新旧関係は、平面ではとらえられず、断面での判断となった。床面はロームで固い。P1は柱穴状の掘り込みだが南に傾いているため、支柱穴かどうかは判断できない。炉は見つからなかった。

出土遺物は石器10点、土器15点が図示できた（第6・7図）。残存率の高い土器は見られなかった。1～4は石鋤である。5は石庖丁で、裏面は礫の自然面である。6・7は刃器で、いずれも風化している。6は表裏に刃を作っている。8は棒状礫器で、先端と側縁に敲打痕がみられる。9は両端を欠損する定角式磨製石斧で、側縁に磨り切った痕跡が見られる。石質が密でなく脆弱である。10は片脚を一部欠損する石鏃である。

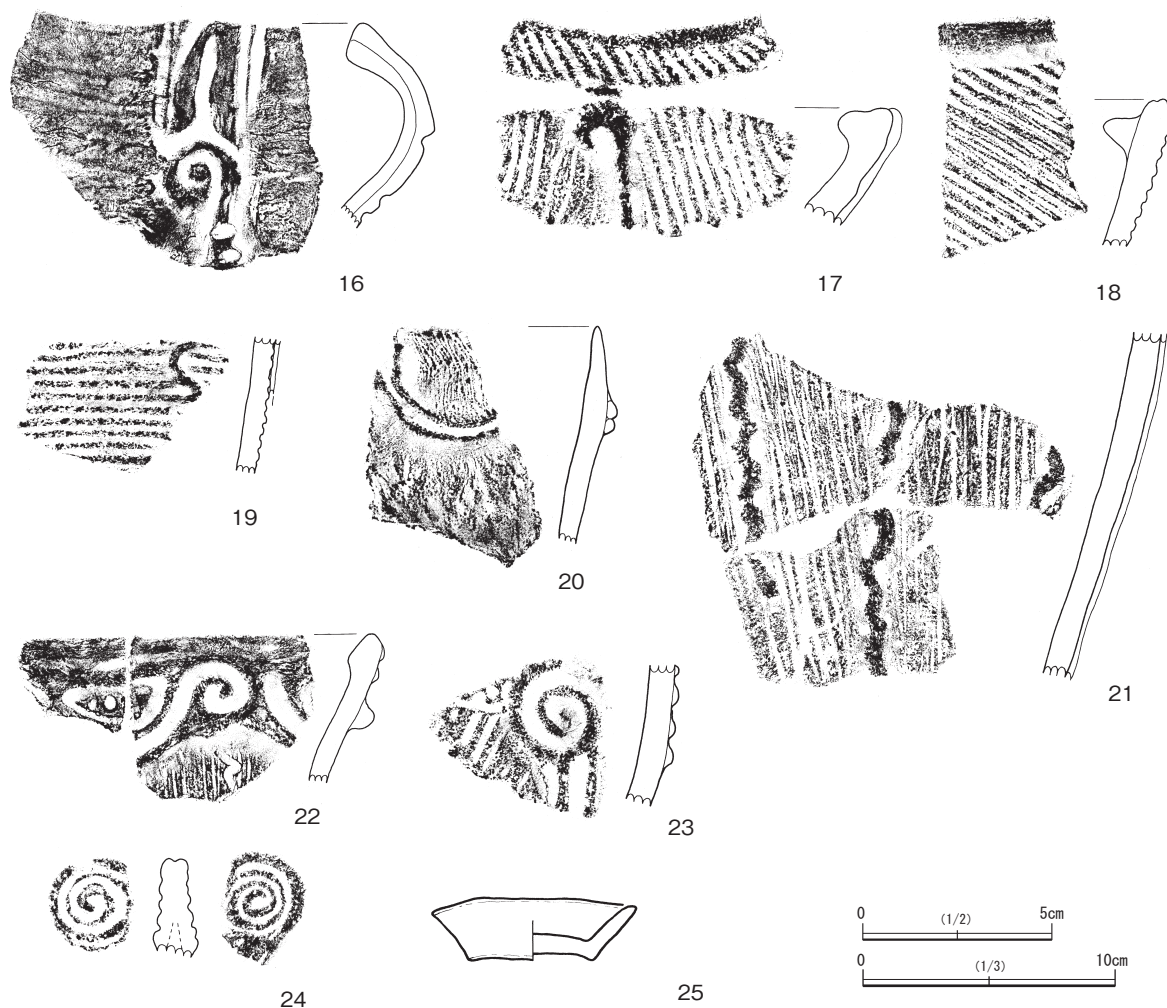
11～25はいずれも住居址覆土からの出土である。11は調査区壁面から出土した土器である。残存率が低く器膚も摩耗しており、型式の判断は難しい。連弧状の沈線が2か所確認できるが、関東地方の連弧文土器ではないだろう。地紋は横位縄文であるが、摩耗のため撚りが判別しづらい。縄文地紋から推して曾利Ⅱ式ごろのものと思われる。12は九兵衛尾根式、13は藤内式である。14～16は井戸尻Ⅰ式で、16はよく磨かれており、焼成も良い。17～21は曾利Ⅱ式、22は曾利Ⅲ式である。23・24は唐草文系Ⅱ段階の土器で、24は口縁部に付く装飾と考えられる。25はミニチュア土器である。素文であるが作りは丁寧で、粘土は非常に細かい砂粒が混ざれている。ミニチュアとするのであれば器形は浅鉢となるが、実用的なものの可能性も考えられる。以上2号住居址の遺物としたが、一部、4号住居址の遺物が含まれている可能性も考えられる。

本址は出土遺物と住居址の切り合いから、曾利Ⅱ期頃の住居と考えられる。



第6図 C I区2号住居址出土遺物 (1) (1～9・12～15；1/3、10；1/2、11；1/4)

1・3・5；粘板岩、2・4；硬砂岩、6・7；ホルンフェルス、8；変輝岩、9；蛇紋岩、10；珪質頁岩



第7図 C I区2号住居址出土遺物 (2) (16~24; 1/3、25; 1/2)

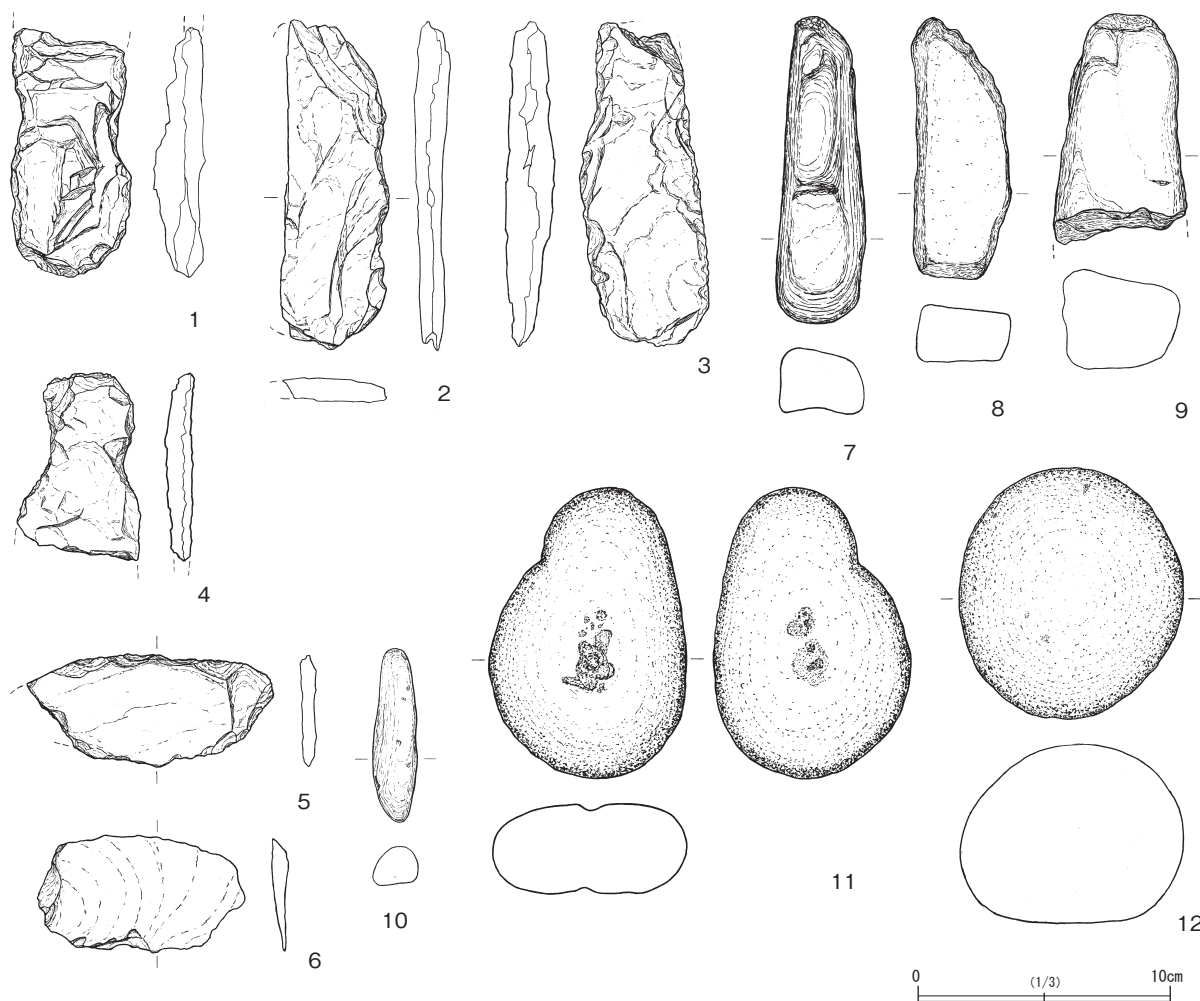
3号住居址

推定径6mほどの竪穴住居址である(第4図)。2号住居址の覆土を切っている。住居北半は調査区外となる。柱穴は調査区北西角に1基が確認できた。床はロームで、やや凹凸があるものの、固い。調査区北端に炉があり、その直上および周辺、床より10~30cmほど高い位置に多くの土器が集中的に遺棄されている。炉は一辺が70cmほどの隅丸方形で、炉床は全体的に良く焼けており、底面より10cm程度の深さまで赤色化・硬化している。一部北東側に安山岩の炉石が残されていたが、他は抜き取られているようである。遺物は今回発掘した遺構の中では最も多く、石器12点、土器41点が図示できた(第8~12図)。

1~4は石鋏で、1・4が撥形、2が短冊形、3が偏刃となる。5は石庖丁で、刃部を丁寧に調整してある。6はやや風化した刃器で、両面ともに刃部の調整痕はほとんど見られない。7~10は棒状礫器で、7は両端に敲打痕が見られる。8の表面は磨ったように平らで、下端には敲打痕がある。9は上端に敲打痕が残り、折れた面に敲打痕は見られない。10は両端に敲打痕がある。11は磨り石で、両面とも磨られており、凹みがつけられている。外縁に敲打痕は見られない。12は丸石で、全体的に磨ったような痕跡があり、一部平らになる。

土器は28・34・36を除いて覆土中の出土である。16~25・29は土器集中箇所から発見され、このうち16・19・22・25は炉付近の調査区西壁面、17・18・20は炉付近の調査区東壁面にかかっている。13・14・24は覆土上層、43は覆土下層、28は柱穴からの出土である。

13~15は曾利Ⅱ式土器、16~26は曾利Ⅲ式土器である。16は焼きの良い完全な形の小型深鉢である。17は口縁部の突起が六単位になるようである。18の時期は難しいが、蛇行沈線が棒状工具で施文



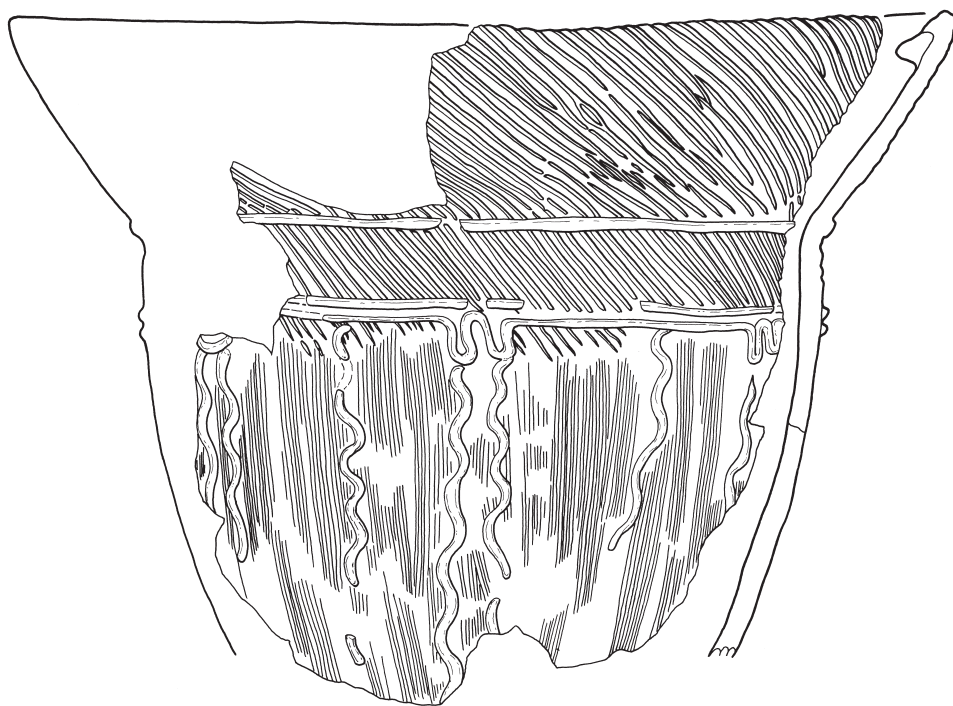
第8図 C I区3号住居址出土遺物 (1) (1/3)

1：スレート、3・4：硬砂岩、2・5・6：粘板岩、7：変成岩、8：砂岩、9：輝緑岩、10：御荷鉾緑色岩、11・12輝石安山岩

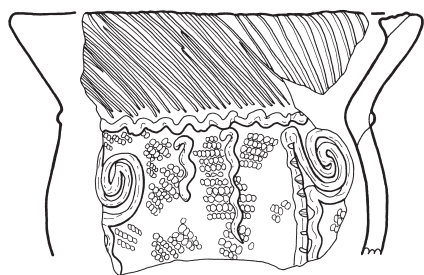
されているため、曾利Ⅲ式としておきたい。19は口縁部に四単位突起が付く深鉢である。曾利式にはあまり見られない形状の深鉢だが、棒状工具による沈線の描き方からして曾利Ⅲ式と思われる。20は小突起と環状突起が一對ずつとなる口縁である。環状突起は口縁上半がいずれも欠けているため断面は復元図となる。片方の環状突起は割れ口が少し摩耗しているため、使用時に欠損したものと思われる。22は頸部に鏝を有する広口壺で、有孔鏝付土器の孔を穿ち忘れたような土器である。鏝より上の内外面に赤彩の痕跡が僅かにみられるが、その範囲は特定できなかった。砂粒を多く含んでいるが、内外面ともによく磨かれている。24は肥厚帯口縁の深鉢で、胴部の隆帯脇が棒状工具でなぞられている。25は口縁部の小突起と環状突起が一對ずつ付く深鉢で、列点と沈線は同じ棒状工具で描かれているようである。26はやや肥厚した口縁の波状が五単位となる。時期の判別が難しいが、沈線は棒状工具で描かれているため曾利Ⅲ式だろう。27は典型的な曾利Ⅳ式の深鉢である。28・29は唐草文系Ⅲ段階の土器である。28は典型的な器形とは言えないが、崩れかけた腕骨文と横位沈線から唐草文Ⅲ段階とした。この土器には口唇部内側に炭化物がこびりついていたので、年代測定を実施した。結果、4835～4618calBP (2σ) の値が出された。

破片資料は文様から推して、30が九兵衛尾根式、31・32が新道式、33・34が井戸尻Ⅰ式、35～41が曾利Ⅱ式、42～47が曾利Ⅲ式、48・49が曾利Ⅳ式である。43と44は接合しないが同一個体とみられる。47は有孔鏝付土器の破片である。50が唐草文系Ⅰ、51～53が唐草文系Ⅲ段階である。なお、51～53は接合しないが同一個体とみられる。

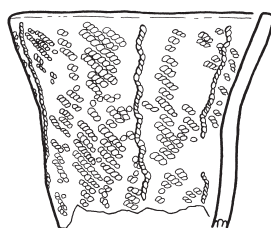
本址は柱穴から出土した28の土器から推して曾利Ⅲ期の住居址と考えられる。



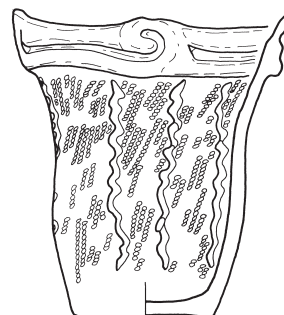
13



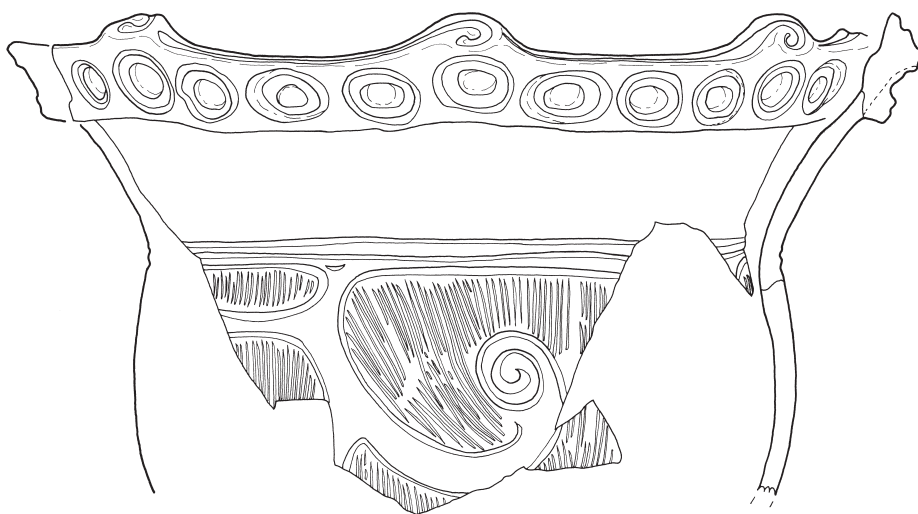
14



15



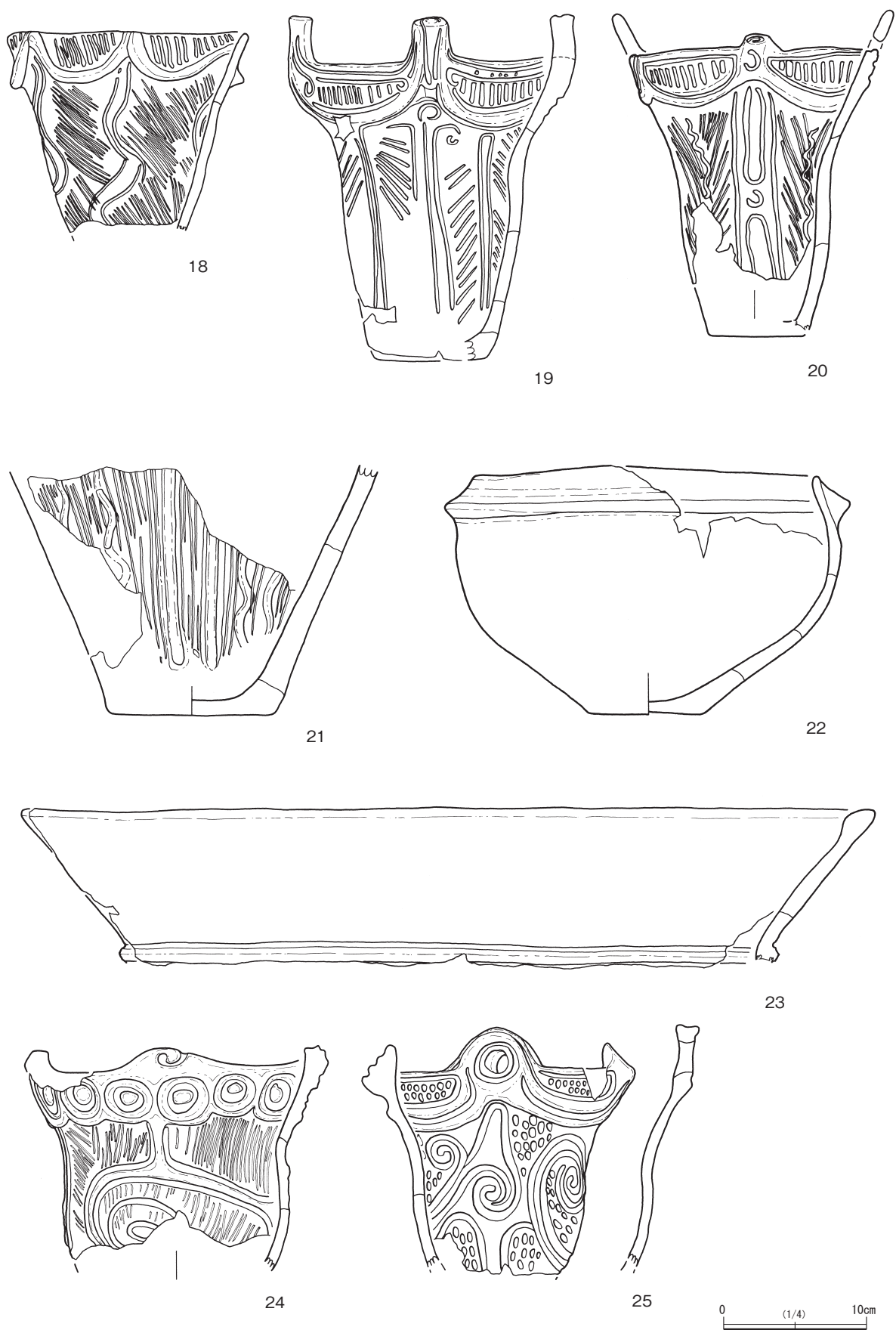
16



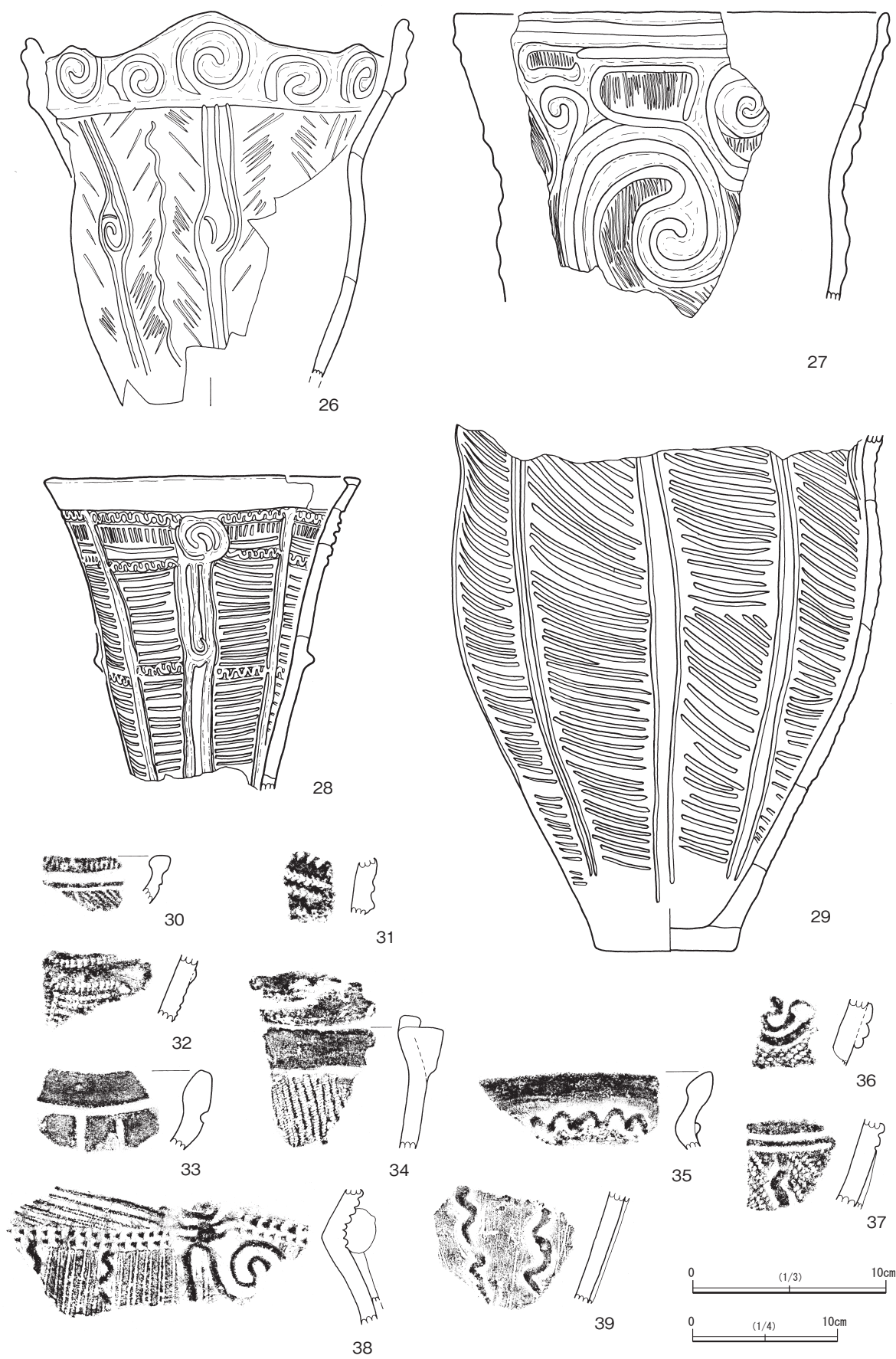
17

0 (1/4) 10cm

第9図 C I区3号住居址出土遺物 (2) (1/4)



第10図 C I 区 3 号住居址出土遺物 (3) (1/4)



第11図 C I区3号住居址出土遺物 (4) (26~29 ; 1/4、30~39 ; 1/3)



第12図 C I 区 3 号住居址出土遺物 (5) (1/3)

4 号住居址

2 号住居址掘削中に、床面に色調の異なる場所を発見した (第 4 図)。当初 2 号住居址の柱穴と考えたが、西側の調査区壁面で 2 号住居址を埋めていることが確認できたことから 4 号住居址とした。住居の規模は不明である。はっきりとした床面は確認できなかった。P 1～3 は形状や深さから貯蔵穴と考えられる。P 4 は柱穴であるが、2 号住居址の柱穴の可能性もある。

出土遺物がないため本址の時期は不明だが、調査区壁面の状況から推して、2 号住居址より古いと推定され、曾利Ⅱ期以前の住居址である。

1号小竪穴

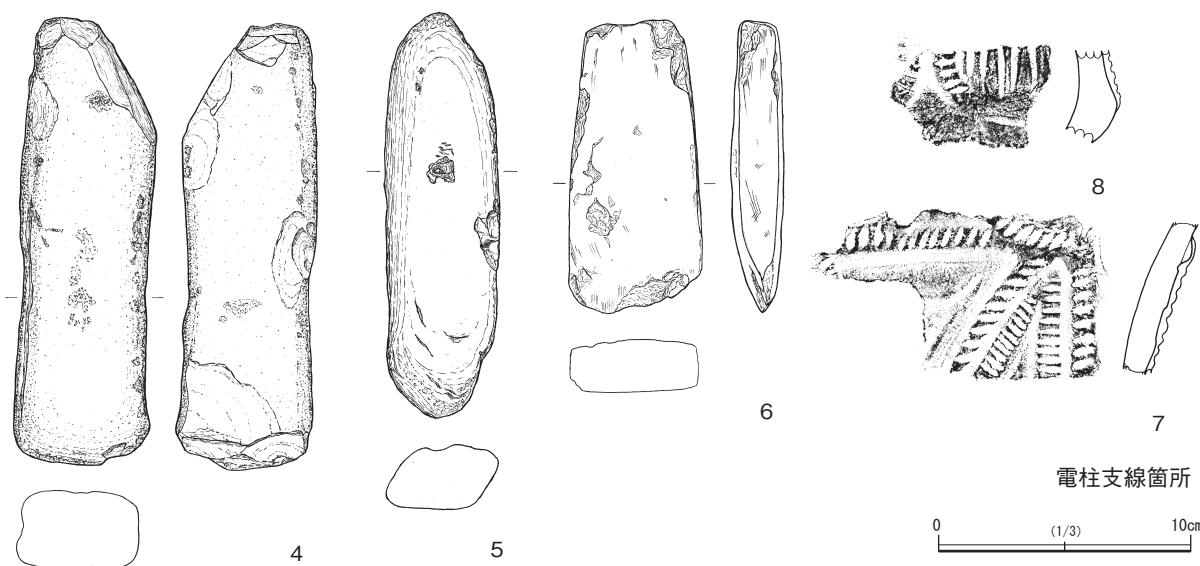
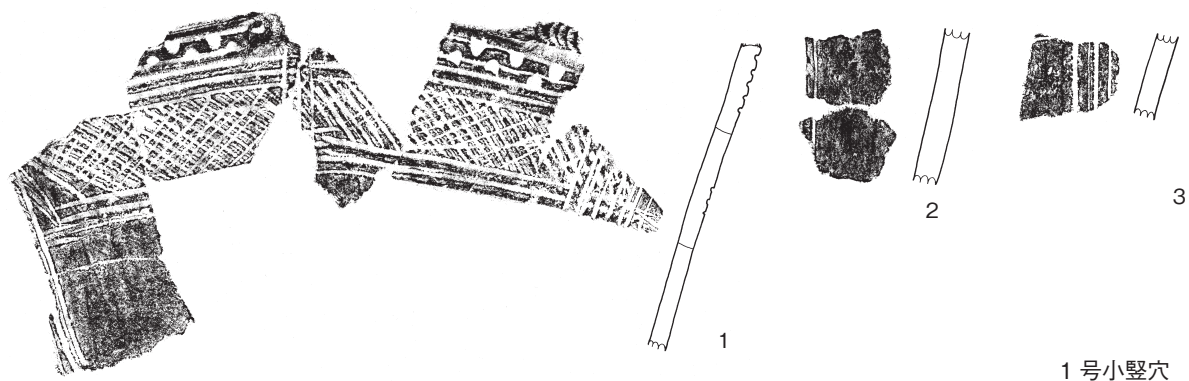
1号住居址の南に近接して発見された長径約80cmの不整形な浅い穴である（第4図）。形状から墓墳と思われる。出土遺物はいずれも九兵衛尾根式土器で、本址の帰属時期も同時期と考えられる。

電柱支線箇所

変電所からの送電に伴い、電柱とその支線を設営する必要があり、工事立会を実施した。電柱箇所では縄文時代中期の土器片1点が発見されたが詳細時期は不明で図示できる大きさではなかった。一方で支線のアンカーを埋設する際にいくつかの遺物が発見された。

4・5は棒状礫器である。4は側縁と先端に敲打痕がみられ、腹部に浅い凹みがつけられている。5は両端と側縁に敲打痕が、下端に一部磨り痕が見られ、腹部中央には凹みがつけられている。6は定角式磨製石斧である。刃先が欠損しているようにも見えるが、その箇所にも研いだ痕跡が見られる。図示できた土器片は2点で、7・8はいずれも井戸尻Ⅰ式である。

工事箇所が狭小のため遺構の輪郭をとらえることができなかったが、出土遺物や令和2年の調査成果を踏まえると、掘削箇所は井戸尻Ⅰ期の墓墳群の一角であろう。



第13図 CⅠ区遺構出土遺物（1/3）

4：硬砂岩、5：緑色岩、6：透閃石岩

(2) CⅡ区の遺構と遺物

小竪穴38基が確認された（第14・15図）。性格不明の遺構はあるものの、いずれも人為的な掘り込みである。墓墳と思われるものが多い。39号小竪穴からCⅢ区まで約30mの間からは遺構は発見されなかった。この区間については表土直下がローム層となるため、田圃の造成のため削平されている可能性も考えられる。

2号小竪穴

長径80cmの平面円形、深さ80cmの断面寸胴形の穴である。形状から貯蔵穴とみられる。出土遺物は土器片2点と少なく、いずれも曾利Ⅱ～Ⅲ式と思われる（第16図1・2）。本址の帰属時期も同じと考えられる。

3号小竪穴

長径90cm、深さ20cmの浅い穴である。長径50cmほどの平らな輝緑岩が置かれている。出土遺物は石器2点である（第16図3・4）。3は棒状礫器で、先端に敲打痕を残す。4は石鏃で刃部が鋸歯状をなす。中期の遺構ではあるが詳細な帰属時期は不明である。

4号小竪穴

径80cm、深さ30cmの円形の穴である。中には3つの大きな礫が入れられていた。調査区東壁面にかかっている北側の石は50cmほどの白色がかかった結晶片岩、南側の石は40cmほどの輝緑岩であった。出土遺物は少なく黒曜石2点である（第16図5・6）。5はやや大きい剥片石器で、使用の際にできた細かい刃こぼれが刃部に残る。6は先端を欠損する石錐で、基部には刃をつぶした細かい調整が見られる。中期の墓壙ではあるが、詳細な帰属時期は不明である。

5号小竪穴

径80cm、深さ10cmほどの浅い楕円形の穴である。出土遺物は無く帰属時期は不明である。形状から墓壙の可能性が考えられる。

6号小竪穴

径80cm、深さ35cmほどの円形の穴である。遺構確認面で土器や礫が見られたが、底面から遺物は出なかった。覆土に炭化した栗がいくつか見られたが、いずれも取り上げ時に崩壊した。壁面に杭痕があり、墓壙と考えられる。出土遺物は唐草文系Ⅲ段階の土器片が2点である（第16図7・8）。本址の時期も同じだろう。

7号小竪穴

長径70cm、深さ10cmほどの楕円形の浅い穴で、底面にやや凸凹がある。出土遺物はない。不整形ではあるが、覆土にローム粒と炭粒を含むため、人為的な掘り込みではある。性格及び帰属時期は不明である。

8号小竪穴

長径40cm、深さ15cmほどの不整形な穴である。出土遺物はない。人為的な掘り込みなのか、古い攪乱なのか判断できなかった。

9号小竪穴

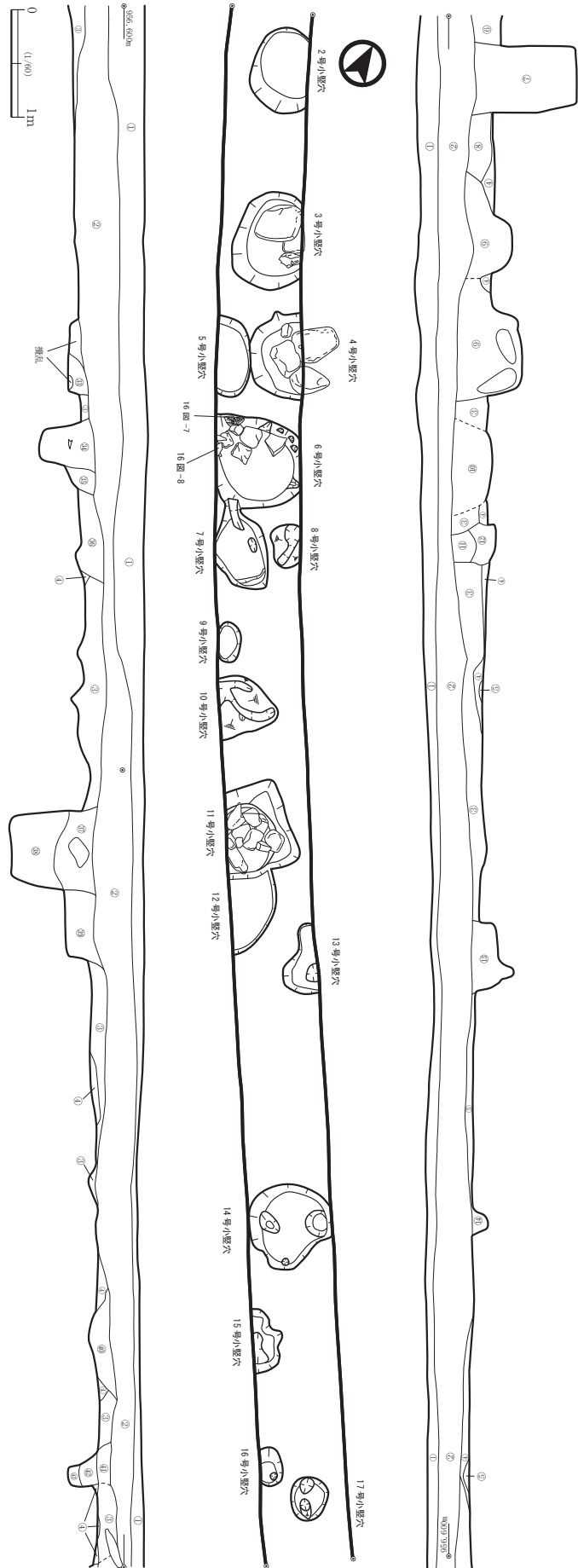
長径30cm、深さ20cmほどの楕円形の穴である。出土遺物はない。底面からの立ち上がりがはっきりとしているので、人為的な掘り込みではあるが、その性格と帰属時期は不明である。

10号小竪穴

径50cm、深さ10cmほどの、ややいびつな浅い穴である。底面もやや不安定である。調査区断面でも明確な掘り込みをとらえることができなかった。性格は不明であるが、底面の様子からすると、中期初頭の墓壙の可能性もある。

11号小竪穴

一辺80cm、深さ80cmのやや深い穴である。12号小竪穴を切っている。遺構確認面は方形であったが、底面は円形となる。確認面付近に安山岩礫が集中しているものの、深い位置には何もない。礫の



- ① 褐色土 (7.5VR4/3)：造成工事による盛土。ローム主体。
- ② 黒色土 (7.5VR2/1)：耕作土。
- ③ にぶい黄褐色土 (10VR4/3)：自然堆積土。しまりあり。粘性なし。
- ④ にぶい黄褐色土 (10VR4/3)：自然堆積土。③ローム主体に③が混じるグラデーショナル層。しまりあり。粘性なし。
- ⑤ 褐色土 (7.5VR4/6)：ローム層。しまりあり。粘性あり。
- ⑥ 暗褐色土 (10VR3/3)：浅い小盛穴覆土か？③と区別できないが、北に④があるため穴覆土となる。混入物なし。しまりあり。粘性なし。
- ⑦ 暗褐色土 (10VR3/3)：2号小盛穴覆土。Φ1～5cmのロームフロックを少量含む。炭粒なし。しまりあり。粘性なし。
- ⑧ 暗褐色土 (10VR3/3)：浅い小盛穴覆土？ローム砂粒を少量含む。炭粒なし。しまりあり。粘性なし。
- ⑨ 暗褐色土 (10VR3/3)：3・4号小盛穴覆土。Φ5mm程度のローム粒をこくわすかに含む。炭粒をこくわすかに含む。しまりあり。粘性なし。
- ⑩ 暗褐色土 (10VR3/3)：6号小盛穴覆土。ローム砂粒と炭粒をわずかに含む。しまりあり。粘性なし。
- ⑪ 暗褐色土 (10VR3/3)：8号小盛穴覆土。Φ5mm～1cmのローム粒と炭粒をこくわすかに含む。しまりあり。粘性なし。
- ⑫ 暗褐色土 (7.5VR3/4)：8号小盛穴覆土。ローム砂粒～5mmのローム粒をやや多く含む。炭粒をわずかに含む。しまりあり。粘性なし。
- ⑬ 暗褐色土 (7.5VR3/4)：13号小盛穴覆土。Φ1cmのローム粒を少量含む。炭粒をわずかに含む。しまりやや強い。粘性なし。断面に土器細片あり。
- ⑭ 暗褐色土 (10VR3/4)：14号小盛穴覆土。ローム砂粒～5mmのローム粒をやや多く含む。炭粒をこくわすかに含む。しまり強い。粘性なし。
- ⑮ 暗褐色土 (10VR3/4)：5号小盛穴覆土。ローム砂粒を含む。炭粒なし。しまりあり。粘性なし。
- ⑯ 暗褐色土 (10VR3/4)：6号小盛穴覆土。炭粒をわずかに含む。しまりあり。粘性なし。
- ⑰ 暗褐色土 (10VR3/4)：6号小盛穴覆土。ローム砂粒をやや多く含む。炭粒をわずかに含む。しまりあり。粘性なし。
- ⑱ 暗褐色土 (10VR3/4)：7号小盛穴覆土。ローム砂粒と炭粒をわずかに含む。しまりあり。粘性なし。
- ⑲ 暗褐色土 (10VR3/3)：11号小盛穴覆土。ローム砂粒と炭粒をこくわすかに含む。しまりあり。粘性なし。
- ⑳ 暗褐色土 (10VR3/3)：12号小盛穴覆土。Φ5mm程度のローム粒を少量含む。炭粒をこくわすかに含む。しまりあり。粘性なし。
- ㉑ 暗褐色土 (10VR3/3)：15号小盛穴覆土。ローム砂粒と炭粒をこくわすかに含む。しまりあり。粘性なし。
- ㉒ 暗褐色土 (10VR3/3)：16号小盛穴覆土。ローム砂粒と炭粒をこくわすかに含む。しまりあり。粘性なし。
- ㉓ 暗褐色土 (10VR3/3)：16号小盛穴覆土。ローム砂粒と炭粒をこくわすかに含む。ローム砂粒が㉒よりやや多い。しまりあり。粘性なし。
- ㉔ 暗褐色土 (10VR3/4)：16号小盛穴覆土。ローム砂粒を少量含む。炭粒をこくわすかに含む。しまりあり。粘性なし。

第14図 C II区 全体図 (1) (1：60)

量に対して遺物量は少ない（第16図9～11）。9は曾利Ⅲ式の環状突起、10・11は唐草文系Ⅲ段階の土器である。遺構の帰属時期も同様だろう。遺構の性格は不明で、貯蔵穴もしくは墓壙と考えられる。

12号小竪穴

径1m、深さ20cmほどの浅い円形の穴で、北側が11号小竪穴に切られている。出土遺物は11号小竪穴との境から出土した土器片2点が図示できた（第16図12・13）。12は曾利Ⅲ式、13は唐草文系Ⅲ段階の土器である。いずれも本址の遺物と思われるが、11号のものである可能性もある。形状から推して墓壙と思われる。

13号小竪穴

径70cm、深さ20cmほどの不整形な穴である。覆土に炭粒を含んでいるため、人為的な掘り込みと思われる。調査区東壁に掛かる部分に底面から10cmほどの深さの穴がある。出土遺物がなく、時期および性格は不明である。

14号小竪穴

長径80cm、深さ10cmほどの浅い穴である。底面は安定せず、南に向かってやや傾斜する。中期後葉の土器片がいくつか発見されたものの、すべて小片で図示できるものはなかった。墓壙と思われる。

15号小竪穴

径60cm、深さ10cmほどの浅い不整形な穴である。調査区断面で立ち上がりをとらえられたため、墓壙と考えられる。遺物が無いため帰属時期は不明である。

16号小竪穴

長径35cm、深さ30cmほどの楕円形の穴である。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。形状から柱穴と考えられる。

17号小竪穴

直径40cm、深さ10cm程度の浅い円形の穴である。底面には10cmほどの深さの穴が2箇所ある。出土遺物がなく、帰属時期は不明である。性格は不明で、攪乱の可能性も考えられる。

18号小竪穴

径45cm、深さ15cmほどの不整形な穴で、底面は不安定である。中期の土器片が2点見つかったが、小片で図示できない。詳細時期は不明である。上面に礫があったため、墓壙の可能性が考えられる。

19号小竪穴

径40cm、深さ30cmほどの不整形な穴で、底面もいびつである。中期の土器片があったが、小片のため図示できなかった。詳細な帰属時期は不明で、遺構の性格も不明である。

20号小竪穴

径40cm、深さ10cmほどの不整形な穴である。時期は不明であるが、調査区壁面で21号小竪穴を切っているのが確認できた。底面は不安定だが、墓壙の可能性が考えられる。

21号小竪穴

径70cm、深さ15cmほどの不整形な穴である。底面は安定しており、径20cmほどの深い穴が開いているが、この穴の底部をとらえることはできなかった。出土遺物は唐草文系Ⅰ段階の土器である（第16図14）。墓壙の可能性が考えられる。

22号小竪穴

ごく一部を確認できた15cm ほどの深さの穴である。出土遺物は3点あり、いずれも唐草文系Ⅰ段階の土器である（第16図15～17）。これらは接合しないが同一個体である。同じく21号小竪穴出土の14とも接合しないが同一個体である。唐草文系Ⅰ段階の墓壙であると考えられる。

23号小竪穴

長径40cm、深さ50cm ほどの柱穴であり、底部に柱痕が確認できた。24号小竪穴を切っている。出土遺物は土器片3点で、18は九兵衛尾根式、19は藤内式である（第17図18～20）。20の多縄文が施された土器片は、型式不明だが中期中葉のものと思われる。詳細な帰属時期は不明だが、中期中葉の柱穴だろう。

24号小竪穴

長径30cm、深さ40cm ほどの柱穴である。底部に柱痕が確認できた。24号小竪穴に切られている。出土遺物はないが、切り合いから中期中葉またはそれ以前の柱穴だろう。

25号小竪穴

長径50cm、深さ30cm の円形の穴である。出土遺物が無いため帰属時期は不明である。形状から墓壙と考えられる。

26号小竪穴

残存長径1.5m、短径50cm、深さ15cm ほどの細長く浅い穴である。出土遺物が無いため帰属時期および性格は不明である。

27号小竪穴

長径60cm、深さ20cm ほどのやや不整形の穴で、底面もやや凹凸がある。26号小竪穴と切り合っているが、前後関係は不明である。出土遺物は無く、性格及び帰属時期は不明である。

28号小竪穴

27号小竪穴に隣接する長径30cm、深さ10cm ほどの小さな穴である。27号小竪穴に伴う掘り込みなのかは不明である。出土遺物は無く、帰属時期と性格は不明である。

29号小竪穴

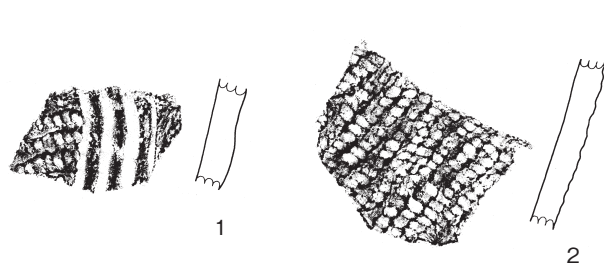
径70cm、深さ50cm の円形の穴である。底面は平らであり、形状から推して貯蔵穴と考えられる。遺物は石器1点と土器片4点が図示できた（第17図21～25）。21は小さな石鋸で、やや偏刃となる。22・23は曾利Ⅰ式の土器片で同一個体である。24は曾利Ⅰ式ないし唐草文系Ⅰ段階の土器、25は唐草文系Ⅱ段階の土器と思われる。出土遺物より帰属時期は唐草文系Ⅱ段階頃と思われる。

30号小竪穴

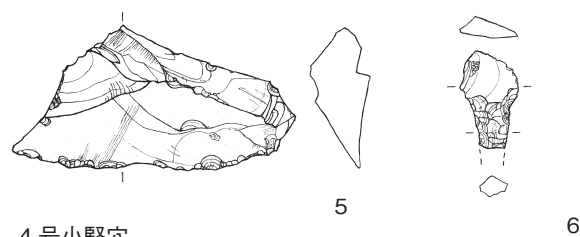
径60cm、深さ20cm 程の底面が平らな円形の穴で、北側が29号小竪穴に切られている。出土遺物は2点で、26は石鋸である（第17図26・27）。27は覆土から横位に潰れた状態で発見された曾利Ⅰ式の深鉢である。29号小竪穴の22・23と非常によく似ており、同一個体の可能性もある。本址は出土遺物から曾利Ⅰ期と考えられる。遺構の深さから推して墓壙の可能性が高い。

31号小竪穴

大きさ不明、深さ30cm ほどの穴で、32号小竪穴に切られている。墓壙もしくは貯蔵穴と思われる。出土遺物は曾利Ⅳ式の土器のみである（第17図28）。本址の帰属時期も同じと考えられる。



2号小豎穴



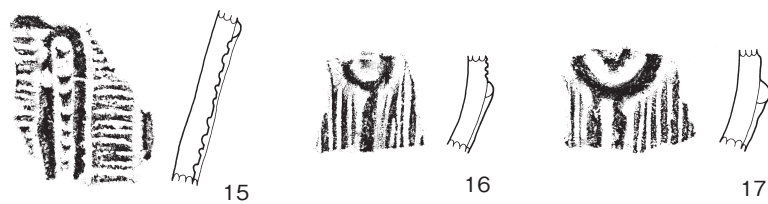
4号小豎穴



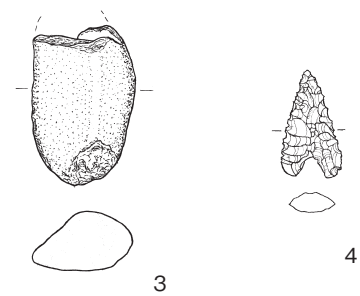
6号小豎穴



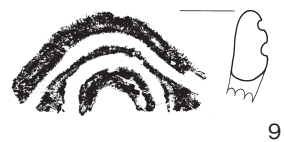
21号小豎穴



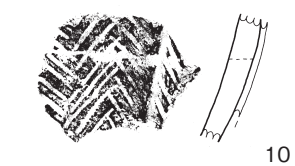
22号小豎穴



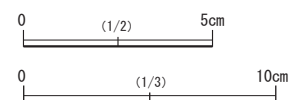
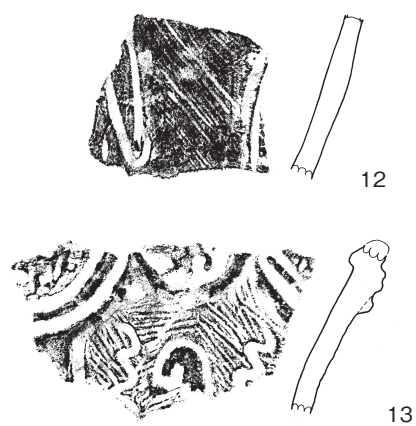
3号小豎穴



11号小豎穴



12号小豎穴



第16図 C II区遺構出土遺物 (1) (1~3・7~17; 1/3、4~6; 1/2)

3: 御荷鉢緑色岩、4~6: 黒曜石

32号小竪穴

径70cm、深さ45cmの円形の穴である。調査区壁面で31号小竪穴を切って作られているのがわかる。出土遺物はないが、遺構の切り合いと形状から曾利Ⅳ式以降の貯蔵穴と考えられる。

33号小竪穴

径50cm、深さ35cmの円形の穴である。形状と深さから推して柱穴と思われる。出土遺物がないため帰属時期は不明である。

34号小竪穴

径70cm、深さ40cmの円形の穴である。底面に深さ10～20cmの穴が4箇所ある。はっきりとはしないが、35号小竪穴を切っているようである。出土遺物はなく、性格および帰属時期は不明である。

35号小竪穴

径80cm、深さ50cmの楕円形の穴である。底面近くに板状の安山岩が置かれている。形状と深さから推して墓壇ないし貯蔵穴と考えられる。出土遺物がないため帰属時期は不明である。

36号小竪穴

径70cm、深さ20cmの楕円形の穴で底面は平らである。形状と深さから推して墓壇と考えられる。遺物は土器片1点で、加曾利ⅤⅢ式と思われる（第17図29）。帰属時期も同じだろう。

37号小竪穴

長径1m、深さ55cmの楕円形の穴で、底面は平らである。形状と深さから推して墓壇と思われる。出土遺物は6点を図示できた（第17図30～35）。30は棒状礫器で、先端と側縁に敲打痕が見られる。31は丸石である。明瞭な加工痕は見られないが一部平らなため、磨っている可能性も考えられる。すべすべして手になじむ。32は曾利Ⅲ式、33・34は曾利Ⅴ式の破片である。35は底部破片で網代痕を残す。時期は出土遺物から曾利Ⅴ期と考えられる。

38号小竪穴

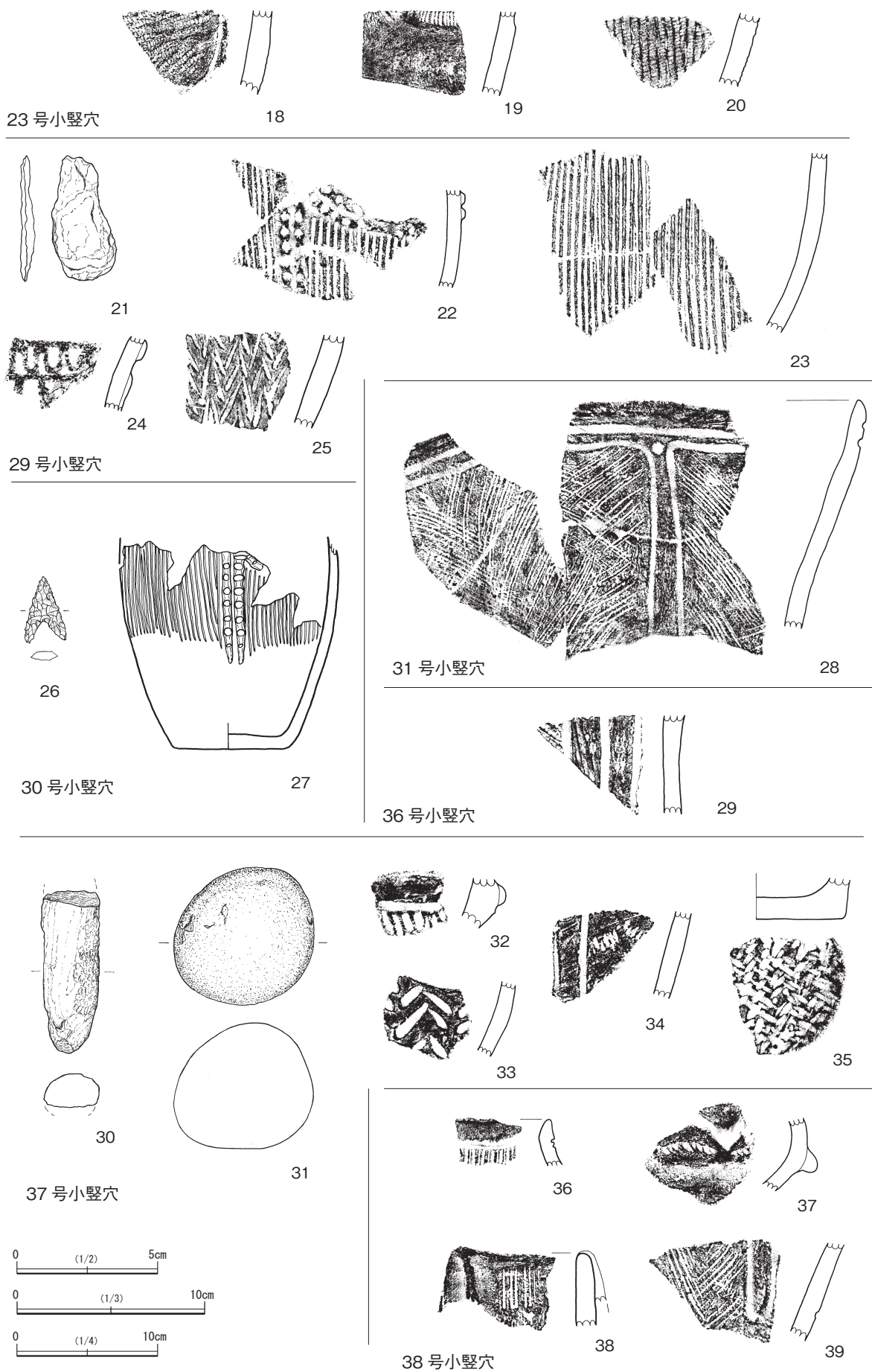
径1m、深さ65cmの円形の穴で、底面は平らである。39号小竪穴を切っている。少し深いが、形状と深さから推して墓壇と思われる。出土遺物のうち、一部37号小竪穴の遺物が混じっている可能性がある（第17図36～39）。土器片は時期がばらばらで、36が九兵衛尾根式、37が井戸尻Ⅰ式、38が曾利Ⅱ～Ⅳ式、39が曾利Ⅳ式である。詳細な帰属時期は遺物からもよくわからないため、曾利式期としておきたい。

39号小竪穴

長径60cm、深さ35cmの円形の穴である。底面が不安定で凹凸が激しく、断面は袋状をなす。覆土にわずかに炭粒を含んでいるため、人為的な掘り込みではあるが、その性格は不明である。出土遺物がないため帰属時期は不明だが、38号小竪穴より古い。曾利期の遺構と思われる。

遺構外の遺物

CⅡ区では基本的に遺物は遺構に伴って発見されている。遺構外の遺物は、耕作等によって表土に混じっていたものが多く、残土から発見されたものが大半を占める。また、遺構確認作業にともなう鋤簾がけ段階で発見されたものもいくつかある。紙面の都合で図示できないが、石鍬・凹石・棒状礫器・石匙、曾利Ⅱ～Ⅴ式の土器片など計30点程度が発見されている。



第17図 C II区遺構出土遺物 (2) (18~25・28~39; 1/3、26; 1/2、27; 1/4)

21; 粘板岩、26; 黒曜石、30; 粘板岩、31; 花崗斑岩

(3) CⅢ区の遺構と遺物

5基の小竪穴が発見された(第18図)。Ⅱ区より80cmほど高い、一段上がった場所である。Ⅱ区と比べて表土下層の黒褐色土がよく残っている。ローム層上面を遺構確認面としたが、調査区断面にローム層まで達しない掘り込みと思われるものがいくつか見られた。掘削時に平面でその輪郭を捉えることはできなかった。確認された遺構のうち、調査区断面にかかるものについては、その掘り込みが上層より始まることが判明した。

42号小竪穴の2mほど南東には拳大の安山岩礫7点がまとまって見つかる場所があったものの、礫には人為的な加工痕はみられず、配置に規則性もみられないことから遺構とは判断できなかった。

42号から43号小竪穴の間約30mおよび43号小竪穴より東側に遺構は見られなかった。

40号小竪穴

長径75cm、深さ60cmのやや不整形な穴で底面は平らである。一部東側に段を有するが、一つの遺構である。形状と深さから推して柱穴と思われる。出土遺物は土器片2点である(第20図1・2)。

1は新道式、2は遺構底面付近から発見された井戸尻Ⅰ式の底部片である。帰属時期は遺物から井戸尻Ⅰ期と考えられる。

41号小竪穴

径50m、深さ50cmの円形の穴である。断面を見ると遺構確認面より40cmほど高い位置から掘り込まれているようである。形状と深さから推して柱穴と思われる。柱穴にしては遺物が多い(第20図3～13)。3は縁辺部に少し刃をつけた円盤状の礫器である。4は棒状礫器で、先端に敲打痕が見られる。5～13は九兵衛尾根式の土器片で、帰属時期も同じと考えられる。

42号小竪穴

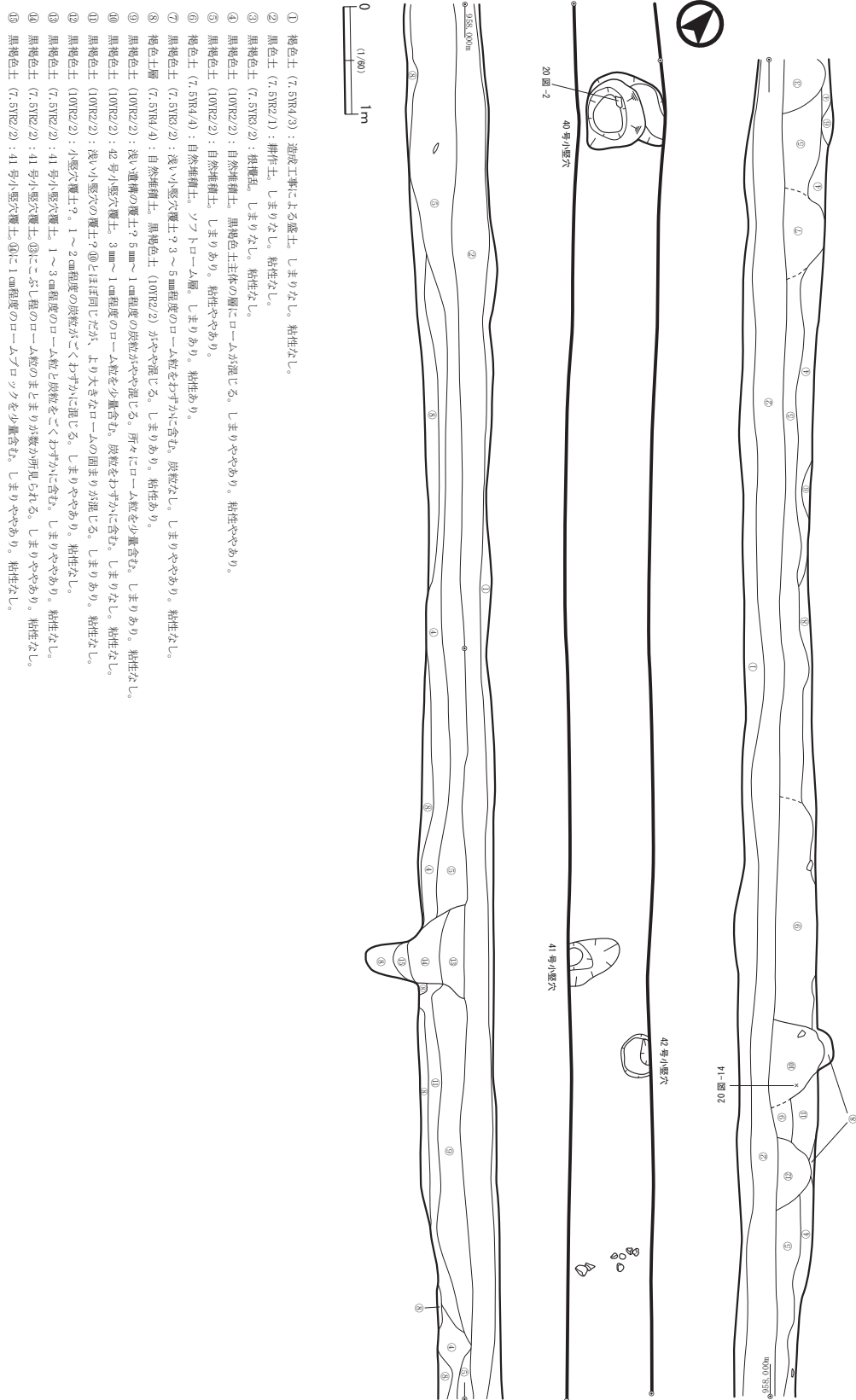
直径40m、深さ20cmの円形の浅い穴である。調査区断面を見ると、41号小竪穴同様、遺構確認面より20～50cmほど高い位置から掘り込まれているようである。遺物は土器片2点である(第20図14・15)。14は調査区壁面から発見された。14・15ともに九兵衛尾根式の土器片である。帰属時期も同じと考えられる。

43号小竪穴

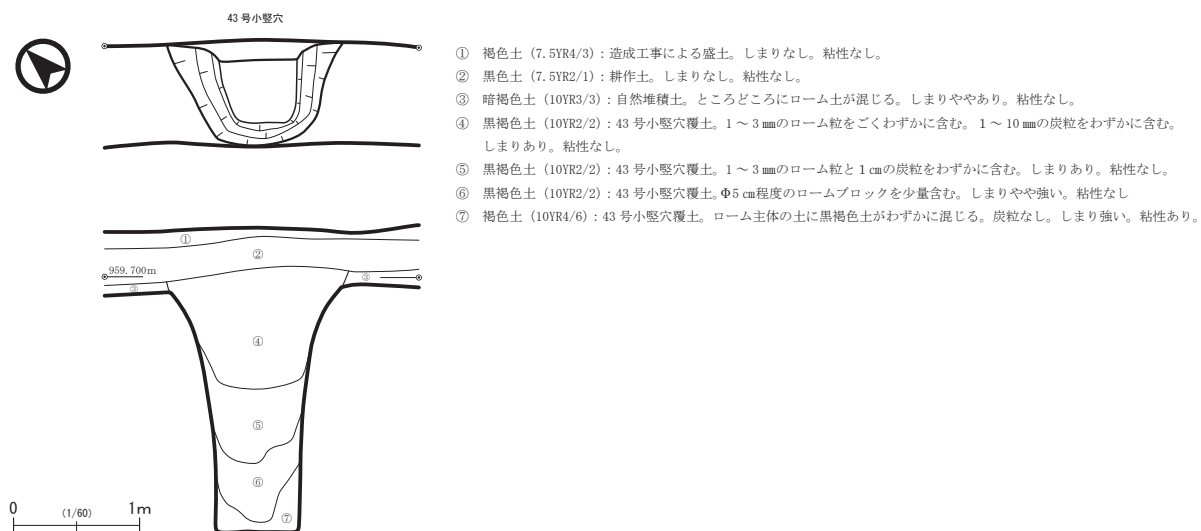
径1.3m、深さ2mの陥し穴である(第19図)。これまで町内の遺跡から発見されている陥し穴の中で最も深く、規模も大きい。底面は平らで、小穴はみられない。出土遺物がないため時期は不明であるが、周辺の状況から考えて縄文時代中期のものであることは間違いないだろう。

遺構外の遺物

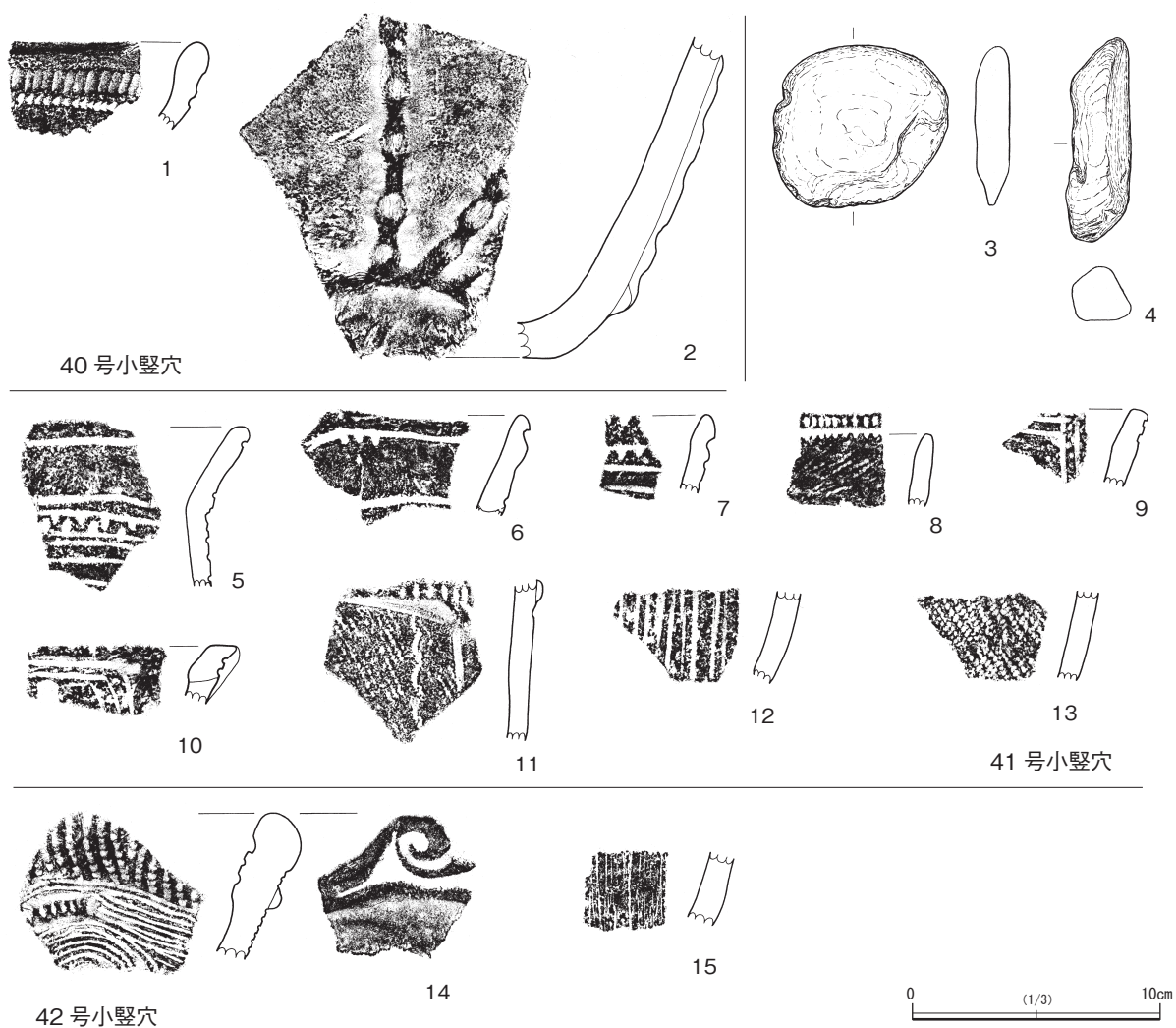
調査区壁面や遺構確認作業中に発見された。紙面の都合で図示できなかったが、石器は石鍬2点と凹石、土器は九兵衛尾根式、井戸尻Ⅰ式、曾利Ⅴ式の破片が数点発見された。このうち九兵衛尾根式の破片が東側調査区壁面から発見されたが、ローム層まで達しない遺構内からの出土と思われる。



第18図 CⅢ区 全体図 (1：60)



第19図 CⅢ区 43号小竪穴 (1:60)



第20図 CⅢ区遺構出土遺物 (1/3)

3: 御荷鉾緑色岩、4: 砂岩

第4章 自然科学分析

第1節 分析概要について

本調査で出土した資料のうち、C I 区3号住居址出土土器（第11図28）の炭化物について、放射性炭素年代測定を実施し、合わせて、C I 区1号住居址埋設土器（第5図6）内の土壌を水洗し、微細遺物の同定を実施した。本分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、同社からの報告書より内容を引用、編集した。

第2節 放射性炭素年代測定

（1）試料

C I 区3号住居址の柱穴から出土した唐草文系Ⅲ期の土器の内面口唇部に付着していた炭化物である。

（2）分析方法

土器から付着炭化物を必要量削り取る。一般的には、塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）が、今回は分析試料がわずかであったため、AAA 処理を行っていない。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径1mm の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、¹⁴C の計数、¹³C 濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C 濃度（¹⁴C/¹²C）を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX- II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C 濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4（Bronk,2009）、較正曲線は IntCal20（Reimer et al.,2020）である。

（3）結果

結果を表1、図21に示す。試料は測定必要なグラファイトが得られている。同位体補正を行った値は、 $4185 \pm 25\text{BP}$ である。

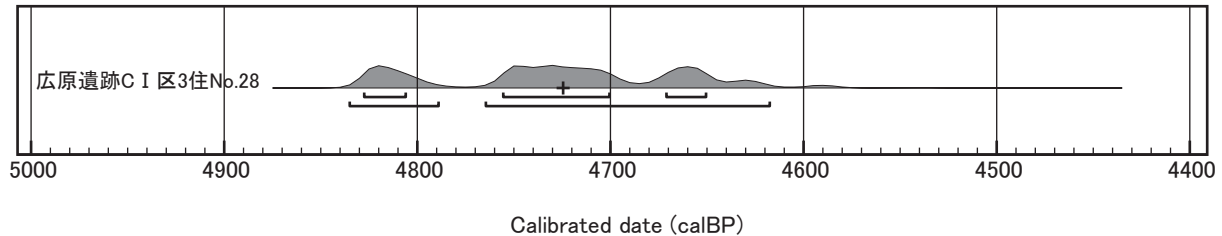
暦年較正は、大気中の¹⁴C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C 濃度の変動、その後訂正された半減期（¹⁴C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは、IntCal20（Reimer et al.,2020）を用いる。 2σ の値は4835～4618calBP を示した。

表 1 放射性炭素年代測定結果

試料 番号	性状	方法	補正年代 BP (暦年較正用)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代						Code No.	
					年代値							
広原遺跡 CⅠ区3住 No.28	土器付着 炭化物	無処理	4185 ± 25 (4183 ± 25)	−27.84 ± 0.58	σ	cal BC 2879 − cal BC 2857	4828 − 4806 calBP	14.7	YU- 17419	pal- 14515		
						cal BC 2807 − cal BC 2752	4756 − 4701 calBP	39.7				
						cal BC 2722 − cal BC 2702	4671 − 4651 calBP	13.9				
					2σ	cal BC 2886 − cal BC 2840	4835 − 4789 calBP	22.0				
						cal BC 2816 − cal BC 2669	4765 − 4618 calBP	73.5				

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期5568年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 4) AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaA はアルカリの濃度を薄くした処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.4を使用。
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データセットはIntCal20を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である。

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5 Atmospheric data from Reimer et al (2020)



第21図 暦年較正結果

第3節 微細物分析

(1) 試料

微細物分析試料は、C I 区 1 号住居址の埋設土器（第5図6）内より採取された土壌を無作為に1 kg 抜き出して分析を依頼した。

(2) 分析方法

試料1 kg を肉眼で観察し、炭化物や骨片、土器片等の遺物の有無を確認抽出後、常温乾燥させる。水を満たした容器内に、乾燥後試料を投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を0.5mm 篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（約20回）。残土を0.5mm 篩で水洗する。水洗後、水に浮いた試料（炭化物主体）と水に沈んだ試料（岩片主体）を、それぞれ粒径4 mm、2 mm、1 mm、0.5mm の篩に通し、粒径別に常温乾燥させる。

水洗・乾燥後の炭化物主体試料・岩片主体試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実や骨片、主に2 mm 以上の炭化材、土器片、剥片類などの遺物を抽出する。

種実の同定は、現生標本等を参考に実施し、部位・状態別の個数と重量、最大径を求めて、結果を一覧表で示す。土器片、剥片類は個数、重量、最大径、炭化材は粒径別重量と最大径、炭化材主体、岩片主体は粒径別重量、植物片は重量を一覧表に併記する。

分析後は、検出物を容器に入れて保管する。

(3) 結果

結果を表2に示す。埋設土器内の土1kgを洗い出した結果、炭化種実167個0.4g、炭化材3.2g（最大1.8cm）、炭化材主体6.6g、岩片主体22.9g、剥片類34個0.2g（最大1.0cm）、土器片1個9.3g（径3.5cm）、植物片0.02g、種実2個が検出された。骨片は検出されなかった。植物片、種実2個（草本のタニソバ近似種、アカザ属）は、炭化していないことから混入と判断されるため、考察より除外する。

炭化種実は、全て破片であり、保存状態は不良である。落葉広葉樹のオニグルミ核18個0.22g（最大9.4mm）、オニグルミ？核73個0.13g、クリ果実2個0.01g未満（最大3.2mm）、クリ？果実（基部）3個0.01g未満（最大2.5mm）、果実11個0.01g未満（最大2.3mm）に同定され、オニグルミが多い。この他、同定に至らなかった微細片60個0.05gを不明（堅果類主体）としている。

表2 微細物分析・種実同定結果

分類群			広原遺跡			備考
			CI 区			
			1 住			
			埋設土器内の土			
部位・状態・粒径						
炭化種実						
オニグルミ	核	破片	18	0.22	9.43	微細片
オニグルミ？	核	破片	73	0.13	-	
クリ	果実	破片	2	<0.01	3.16	
クリ？	果実（基部）	破片	3	<0.01	2.47	
	果実	破片	11	<0.01	2.31	
不明（堅果類主体）		破片	60	0.05	-	
炭化種実合計（不明を除く）			107	0.35	-	
炭化材	>4mm		-	1.33	17.66	土粒類混じる
	4-2mm		-	1.87	-	
炭化材主体	2-1mm		-	3.07	-	
	1-0.5mm		-	3.50	-	
岩片主体	>4mm		-	8.29	-	炭化物類混じる
	4-2mm		-	2.64	-	
	2-1mm		-	3.94	-	
	1-0.5mm		-	8.02	-	
剥片類	>1mm		34	0.23	10.21	
土器片			1	9.28	34.61	
植物片			-	0.02	-	混入の可能性
種実						
タニソバ近似種	果実	完形	1	<0.01	-	混入の可能性
アカザ属	種子	完形	1	<0.01	-	混入の可能性
分析量			-	1000	-	
表示単位			(個)	乾重 (g)	最大径 (mm)	

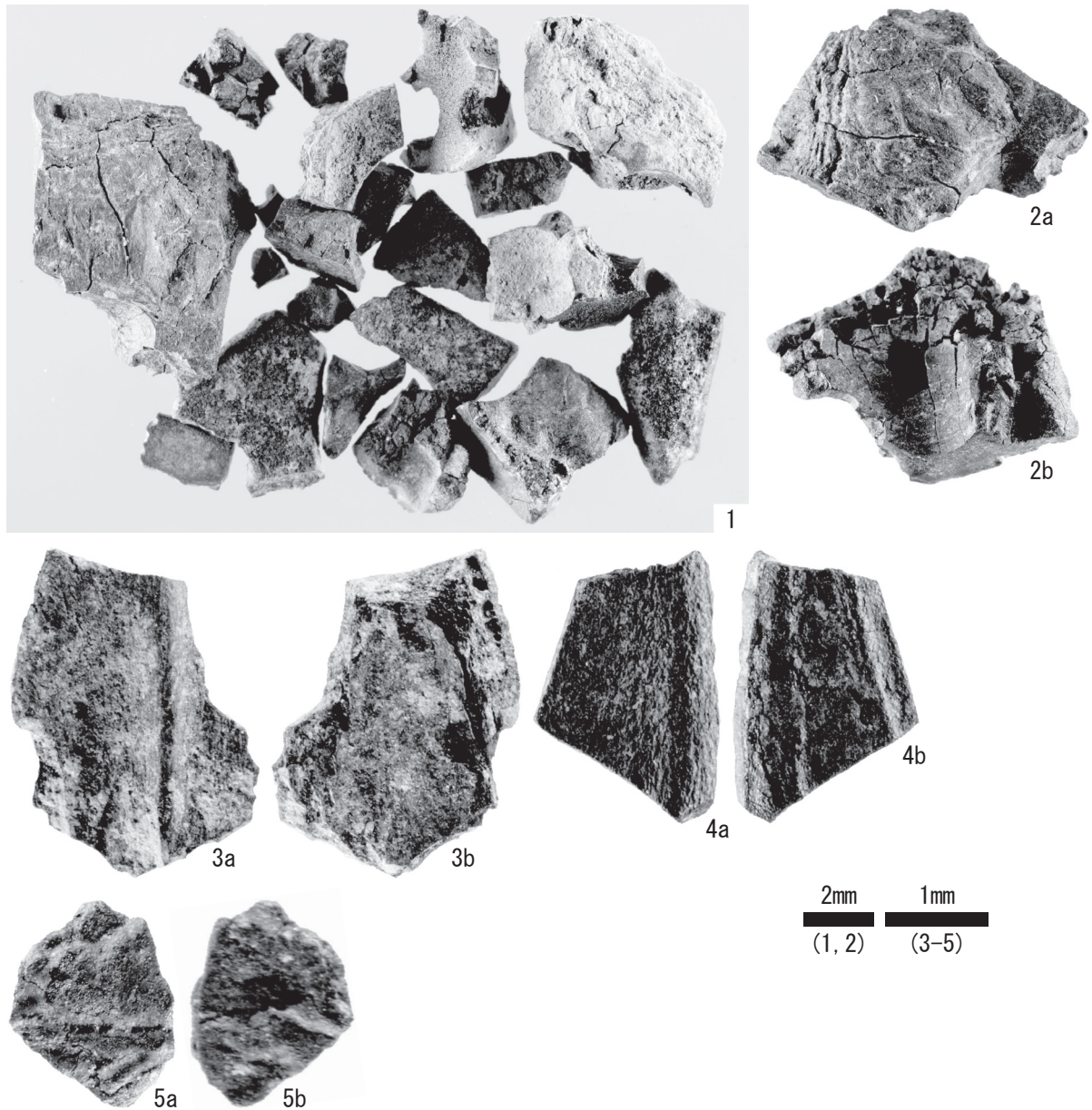
(4) 考察

微細物分析の結果、埋設土器内の土1kgより、炭化種実、炭化材、剥片類、土器片などの遺物が検出された。炭化種実は、落葉広葉樹のオニグルミ、クリに同定され、オニグルミが多い組成を示した。高木になる河畔林要素のオニグルミや、林縁などの明るく開けた場所を好んで生育する二次林要素のクリは、現在の本地域にも分布しており、当時の遺跡周辺域の落葉樹林に生育していたと考えられる。

また、堅果類のオニグルミ、クリは、果実内の子葉が食用可能である。オニグルミ、クリの出土炭化核片や果実片は、周辺の落葉樹林から持ち込まれ、食用のために中の子葉を取り出した後の食糧残渣と示唆され、火を受けたとみなされる。ただし、埋設土器内で火を受けたか、別の場所で火を受け

たものが混入したかは分析段階では不明である。

なお、令和2年度の本遺跡調査においても、A区J3号住居址出土埋甕内土壌より、オニグルミ核、クリ果実の他、トチノキ種子などの炭化種実が確認されている。



- 1. オニグルミ 核(CI区 1住;No. 1)
- 3. クリ 果実(CI区 1住;No. 1)
- 5. クリ? 果実(基部) (CI区 1住;No. 1)

- 2. オニグルミ 核(CI区 1住;No. 1)
- 4. クリ 果実(CI区 1住;No. 1)

第22図 炭化種実

第5章 まとめ

第1節 出土遺物について

今回の調査において出土した土器の様相として特徴的であったのは、これまでのA区およびB区の調査とは異なり、唐草文系土器の出土がやや多い点である。ただし、典型的な器形や文様のものは少なく、客体的な存在であったろうと推測される。

石器については複数の石鍬・石庖丁などの農具に加え、棒状礫器や凹石があり、少数の石鏃が加わる、中期の典型的な様相と言ってよいだろう。

電柱支線箇所で見出された定角式磨製石斧（第13図6）は透閃石岩製であった。令和2年度に実施した調査のA区J3号住居址の埋蔵から発見された定角式磨製石斧2本を観察から曹長岩と報告したが（富士見町教委2021）、報告書の刊行後、透閃石岩ではないかとの指摘があった。そのため黒耀石研究センターの中村由克氏に鑑定してもらったところ、その2本と、蛇紋岩とみていたA区J2号住居址出土の定角式磨製石斧も同様に、透閃石岩である事が判明した。石基が密であり非常に比重が高い特徴がある。この特徴が第13図6にもあてはまることから、この石器についても透閃石岩であると判断した。長野県大北地域との交易・交流を想定する必要がある。

第2節 広原遺跡の縄文中期集落について

令和2年度に実施した発掘調査によって、旧地形を根拠にA区とB区が別集落であると想定した。今回C区の調査でA区に見られなかった唐草文系土器がやや多く出土していることから、A区とB・C区の集落は別集落であり、かつ別集団である可能性も考えられる。

令和2年度のB区の調査では墓域群の一端を捉えることができ、墓域はB区西側に集中していることが判明した。この集落を環状集落と想定すると墓域は北と南西側に連続して広がり、円を描くと推測していた。今回のC区の調査で墓域のひろがり方は想定通りとなったが、規模は予想よりも大きいものとなった。また、削平されている可能性があるものの、墓域の南東側に住居址が見つからなかったため、集落形状については今後の課題としたい。CⅢ区地点については、中期初頭の遺構遺物がみられることからこの地点の東西に遺構が広がっていると考えられる。遺跡の全容の解明は今後の調査に期待したい。

参考文献

- ・櫛原功一 2008「曾利式土器」『小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器』
- ・小池孝 2013「上伊那地域における縄文時代中期土器」『日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集 文化の十字路 信州』
- ・中部高地縄文土器集成グループ 1979『中部高地縄文土器集成 第1集 ―縄文中期後半の部 その1―』
- ・三上徹也 2002「所謂「唐草文土器」の構造・変遷と型式名に関する考察」『長野県考古学会誌』98号
- ・守矢昌文 2013「諏訪地域における縄文時代中期の土器群構成とその分布」『日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集 文化の十字路 信州』
- ・富士見町教育委員会 2021『広原遺跡―太陽光発電所建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- ・富士見村誌刊行会 1961『富士見村誌』
- ・藤森栄一編 1965『井戸尻』中央公論美術出版



C I 区 完掘状況（南より）



C I 区 1 号住居址（北より）



C I 区 1 号住居址埋設土器 出土状況（南より）



C I 区 2 号・4 号住居址（南より）



C I 区 3 号 遺物出土状況（南より）



C I 区 3 号住居址 (南より)



C I 区 1 号小竪穴 (西より)



C II 区 完掘状況 (北より)



C II 区 2 号小竪穴 (西より)



C II 区 4 号・5 号小竪穴 (西より)



C II 区 3～8 号小竪穴 (南より)



C II区 6～8号小竪穴（東より）



C II区 9号・10号小竪穴（南より）



C II区 11号・12号小竪穴（南より）



C II区 13号小竪穴（西より）



C II区 14号小竪穴（南より）



C II区 15号小竪穴（南より）



C II区 16号・17号小竪穴（南より）



C II区 18号小竪穴（南より）



C II 区19号小竪穴（西より）



C II 区21号～25号小竪穴（西より）



C II 区26～28号小竪穴（西より）



C II 区29号～32号小竪穴（西より）



C II 区33号～36号小竪穴（西より）



C II 区37号～39号小竪穴（西より）



C III 区40号小竪穴（南西より）



C III 区41号・42号小竪穴（南西より）



C III区43号小豎穴（南西より）



調査風景



C I 区 1 号住居址 (No.6)



C I 区 3 号住居址 (No.15)



C I 区 3 号住居址 (No.16)



C I 区 3 号住居址 (No.19)



C I 区 3 号住居址 (No.20)



C I 区 3 号住居址 (No.22)



C I 区 3 号住居址 (No.24)



C I 区 3 号住居址 (No.25)



C I 区 3 号住居址 (No.28)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ひろっばらいせき							
書 名	広原遺跡							
副 書 名	太陽光発電所建設水路付け替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	町内遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編 著 者 名	副島蔵人							
編 集 機 関	長野県富士見町教育委員会							
所 在 地	〒399-0214 長野県諏訪郡富士見町落合10777 TEL 0266-62-2400							
発 行 年 月 日	2023年 3 月31日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所在地	コード		北 緯 度分秒	東 経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
ひろっばら 広 原 遺 跡	ながの けんす わ ぐん 長野県諏訪郡 ふじ み まち ふじ 富士見町富士見	20362	41	35度53分7秒	138度13 分50秒	2021.7.6 ～10.15	109.95m ²	太陽光発電所 建設工事に伴 う水路付け替 え工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
広原遺跡	集落址	縄文・平安		住居址、陥し穴、墓壇		縄文土器、石器		
要約	縄文時代及び平安時代の集落遺跡であり、町内でも縄文時代中期における拠点的な集落として知られている。本遺跡を含む土地について開発事業に伴う埋蔵文化財の照会があり、保護協議を重ねて令和2年に発掘調査を実施し調査報告書を刊行したが、令和3年の工事終盤に急遽、敷地内の水路付け替え工事を行う必要が発生した。令和2年の調査で墓域が確認されていたB区付近の工事であった。狭小な工事のため当初工事立会を予定していたが、掘削したところ多くの遺構・遺物が発見されたため、C区として発掘調査に切り替えて、当該地点については記録保存を行うこととなった。 結果、縄文時代中期の住居址と小竪穴およびこれらに伴う遺物を発見した。							

広原遺跡

—太陽光発電所建設水路付け替え工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 2023年3月31日

発 行 長野県富士見町教育委員会

印 刷 ヤジマプリント